



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本の歳時記
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Description	直筆草稿 183頁。
Issue Date	2020-04-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77423
Type	manuscript
File Information	B013_01024759p687p902.pdf



書名 朝鮮社会 (47)

原稿番号：# 687-705

号数：

9本

字詰： 字× 行× 段 ()

改丁指定：

文撰氏名：朝日 (箱 分) 月 日

植字氏名： (頁^{ミダシ}ナ) 月 日

担当

[illegible][illegible]

2下						
7						
里歳時記記載節日は左の通りである。						
正月	元日	二日	三日	四日	六日	七日
	十日	十四日	十五日	十六日	二十	
	日	二十六日	節分(大晦日の後下り)			
二月	初午	二日	八日	十五日	徳山年	
三月	三日					
四月	八日	十五日				
五月	朔日	四日	五日			
六月	上旬	十五日	二	四日		
七月	朔日	七日	十日	十二日	十三日	

神すゝる望つて 綱をし蓄の中か ハ九個作的時殊性も の祝によりここては 日に経付かて片事 祖神の祭神の為に ある。	城下葛七日 一月二日六日七日八日九日十日十一日十二日十三日十四日十五日十六日十七日十八日十九日二十日二十一日二十二日二十三日二十四日二十五日二十六日二十七日二十八日二十九日三十日三十一日三十二日三十三日三十四日三十五日三十六日三十七日三十八日三十九日四十日四十一日四十二日四十三日四十四日四十五日四十六日四十七日四十八日四十九日五十日五十一日五十二日五十三日五十四日五十五日五十六日五十七日五十八日五十九日六十日六十一日六十二日六十三日六十四日六十五日六十六日六十七日六十八日六十九日七十日七十一日七十二日七十三日七十四日七十五日七十六日七十七日七十八日七十九日八十日八十一日八十二日八十三日八十四日八十五日八十六日八十七日八十八日八十九日九十日九十一日九十二日九十三日九十四日九十五日九十六日九十七日九十八日九十九日一百日一百一日一百二日一百三日一百四日一百五日一百六日一百七日一百八日一百九日二百日二百一日二百二日二百三日二百四日二百五日二百六日二百七日二百八日二百九日三百日三百一日三百二日三百三日三百四日三百五日三百六日三百七日三百八日三百九日四百日四百一日四百二日四百三日四百四日四百五日四百六日四百七日四百八日四百九日五百日五百一日五百二日五百三日五百四日五百五日五百六日五百七日五百八日五百九日六百日六百一日六百二日六百三日六百四日六百五日六百六日六百七日六百八日六百九日七百日七百一日七百二日七百三日七百四日七百五日七百六日七百七日七百八日七百九日八百日八百一日八百二日八百三日八百四日八百五日八百六日八百七日八百八日八百九日九百日九百一日九百二日九百三日九百四日九百五日九百六日九百七日九百八日九百九日一千日一千一日一千二日一千三日一千四日一千五日一千六日一千七日一千八日一千九日二千日二千一日二千二日二千三日二千四日二千五日二千六日二千七日二千八日二千九日三千日三千一日三千二日三千三日三千四日三千五日三千六日三千七日三千八日三千九日四千日四千一日四千二日四千三日四千四日四千五日四千六日四千七日四千八日四千九日五千日五千一日五千二日五千三日五千四日五千五日五千六日五千七日五千八日五千九日六千日六千一日六千二日六千三日六千四日六千五日六千六日六千七日六千八日六千九日七千日七千一日七千二日七千三日七千四日七千五日七千六日七千七日七千八日七千九日八千日八千一日八千二日八千三日八千四日八千五日八千六日八千七日八千八日八千九日九千日九千一日九千二日九千三日九千四日九千五日九千六日九千七日九千八日九千九日一万日一万一日一万二日一万三日一万四日一万五日一万六日一万七日一万八日一万九日二万日二万一日二万二日二万三日二万四日二万五日二万六日二万七日二万八日二万九日三万日三万一日三万二日三万三日三万四日三万五日三万六日三万七日三万八日三万九日四万日四万一日四万二日四万三日四万四日四万五日四万六日四万七日四万八日四万九日五万日五万一日五万二日五万三日五万四日五万五日五万六日五万七日五万八日五万九日六万日六万一日六万二日六万三日六万四日六万五日六万六日六万七日六万八日六万九日七万日七万一日七万二日七万三日七万四日七万五日七万六日七万七日七万八日七万九日八万日八万一日八万二日八万三日八万四日八万五日八万六日八万七日八万八日八万九日九万日九万一日九万二日九万三日九万四日九万五日九万六日九万七日九万八日九万九日十万日十万一日十万二日十万三日十万四日十万五日十万六日十万七日十万八日十万九日十一万日十一万一日十一万二日十一万三日十一万四日十一万五日十一万六日十一万七日十一万八日十一万九日十二万日十二万一日十二万二日十二万三日十二万四日十二万五日十二万六日十二万七日十二万八日十二万九日十三万日十三万一日十三万二日十三万三日十三万四日十三万五日十三万六日十三万七日十三万八日十三万九日十四万日十四万一日十四万二日十四万三日十四万四日十四万五日十四万六日十四万七日十四万八日十四万九日十五万日十五万一日十五万二日十五万三日十五万四日十五万五日十五万六日十五万七日十五万八日十五万九日十六万日十六万一日十六万二日十六万三日十六万四日十六万五日十六万六日十六万七日十六万八日十六万九日十七万日十七万一日十七万二日十七万三日十七万四日十七万五日十七万六日十七万七日十七万八日十七万九日十八万日十八万一日十八万二日十八万三日十八万四日十八万五日十八万六日十八万七日十八万八日十八万九日十九万日十九万一日十九万二日十九万三日十九万四日十九万五日十九万六日十九万七日十九万八日十九万九日二十万日二十万一日二十万二日二十万三日二十万四日二十万五日二十万六日二十万七日二十万八日二十万九日二十一万日二十一万一日二十一万二日二十一万三日二十一万四日二十一万五日二十一万六日二十一万七日二十一万八日二十一万九日二十二万日二十二万一日二十二万二日二十二万三日二十二万四日二十二万五日二十二万六日二十二万七日二十二万八日二十二万九日二十三万日二十三万一日二十三万二日二十三万三日二十三万四日二十三万五日二十三万六日二十三万七日二十三万八日二十三万九日二十四万日二十四万一日二十四万二日二十四万三日二十四万四日二十四万五日二十四万六日二十四万七日二十四万八日二十四万九日二十五万日二十五万一日二十五万二日二十五万三日二十五万四日二十五万五日二十五万六日二十五万七日二十五万八日二十五万九日二十六万日二十六万一日二十六万二日二十六万三日二十六万四日二十六万五日二十六万六日二十六万七日二十六万八日二十六万九日二十七万日二十七万一日二十七万二日二十七万三日二十七万四日二十七万五日二十七万六日二十七万七日二十七万八日二十七万九日二十八万日二十八万一日二十八万二日二十八万三日二十八万四日二十八万五日二十八万六日二十八万七日二十八万八日二十八万九日二十九万日二十九万一日二十九万二日二十九万三日二十九万四日二十九万五日二十九万六日二十九万七日二十九万八日二十九万九日三十万日三十万一日三十万二日三十万三日三十万四日三十万五日三十万六日三十万七日三十万八日三十万九日三十一万日三十一万一日三十一万二日三十一万三日三十一万四日三十一万五日三十一万六日三十一万七日三十一万八日三十一万九日三十二万日三十二万一日三十二万二日三十二万三日三十二万四日三十二万五日三十二万六日三十二万七日三十二万八日三十二万九日三十三万日三十三万一日三十三万二日三十三万三日三十三万四日三十三万五日三十三万六日三十三万七日三十三万八日三十三万九日三十四万日三十四万一日三十四万二日三十四万三日三十四万四日三十四万五日三十四万六日三十四万七日三十四万八日三十四万九日三十五万日三十五万一日三十五万二日三十五万三日三十五万四日三十五万五日三十五万六日三十五万七日三十五万八日三十五万九日三十六万日三十六万一日三十六万二日三十六万三日三十六万四日三十六万五日三十六万六日三十六万七日三十六万八日三十六万九日三十七万日三十七万一日三十七万二日三十七万三日三十七万四日三十七万五日三十七万六日三十七万七日三十七万八日三十七万九日三十八万日三十八万一日三十八万二日三十八万三日三十八万四日三十八万五日三十八万六日三十八万七日三十八万八日三十八万九日三十九万日三十九万一日三十九万二日三十九万三日三十九万四日三十九万五日三十九万六日三十九万七日三十九万八日三十九万九日四十万日四十万一日四十万二日四十万三日四十万四日四十万五日四十万六日四十万七日四十万八日四十万九日四十一万日四十一万一日四十一万二日四十一万三日四十一万四日四十一万五日四十一万六日四十一万七日四十一万八日四十一万九日四十二万日四十二万一日四十二万二日四十二万三日四十二万四日四十二万五日四十二万六日四十二万七日四十二万八日四十二万九日四十三万日四十三万一日四十三万二日四十三万三日四十三万四日四十三万五日四十三万六日四十三万七日四十三万八日四十三万九日四十四万日四十四万一日四十四万二日四十四万三日四十四万四日四十四万五日四十四万六日四十四万七日四十四万八日四十四万九日四十五万日四十五万一日四十五万二日四十五万三日四十五万四日四十五万五日四十五万六日四十五万七日四十五万八日四十五万九日四十六万日四十六万一日四十六万二日四十六万三日四十六万四日四十六万五日四十六万六日四十六万七日四十六万八日四十六万九日四十七万日四十七万一日四十七万二日四十七万三日四十七万四日四十七万五日四十七万六日四十七万七日四十七万八日四十七万九日四十八万日四十八万一日四十八万二日四十八万三日四十八万四日四十八万五日四十八万六日四十八万七日四十八万八日四十八万九日四十九万日四十九万一日四十九万二日四十九万三日四十九万四日四十九万五日四十九万六日四十九万七日四十九万八日四十九万九日五十万日五十万一日五十万二日五十万三日五十万四日五十万五日五十万六日五十万七日五十万八日五十万九日五十一万日五十一万一日五十一万二日五十一万三日五十一万四日五十一万五日五十一万六日五十一万七日五十一万八日五十一万九日五十二万日五十二万一日五十二万二日五十二万三日五十二万四日五十二万五日五十二万六日五十二万七日五十二万八日五十二万九日五十三万日五十三万一日五十三万二日五十三万三日五十三万四日五十三万五日五十三万六日五十三万七日五十三万八日五十三万九日五十四万日五十四万一日五十四万二日五十四万三日五十四万四日五十四万五日五十四万六日五十四万七日五十四万八日五十四万九日五十五万日五十五万一日五十五万二日五十五万三日五十五万四日五十五万五日五十五万六日五十五万七日五十五万八日五十五万九日五十六万日五十六万一日五十六万二日五十六万三日五十六万四日五十六万五日五十六万六日五十六万七日五十六万八日五十六万九日五十七万日五十七万一日五十七万二日五十七万三日五十七万四日五十七万五日五十七万六日五十七万七日五十七万八日五十七万九日五十八万日五十八万一日五十八万二日五十八万三日五十八万四日五十八万五日五十八万六日五十八万七日五十八万八日五十八万九日五十九万日五十九万一日五十九万二日五十九万三日五十九万四日五十九万五日五十九万六日五十九万七日五十九万八日五十九万九日六十万日六十万一日六十万二日六十万三日六十万四日六十万五日六十万六日六十万七日六十万八日六十万九日六十一万日六十一万一日六十一万二日六十一万三日六十一万四日六十一万五日六十一万六日六十一万七日六十一万八日六十一万九日六十二万日六十二万一日六十二万二日六十二万三日六十二万四日六十二万五日六十二万六日六十二万七日六十二万八日六十二万九日六十三万日六十三万一日六十三万二日六十三万三日六十三万四日六十三万五日六十三万六日六十三万七日六十三万八日六十三万九日六十四万日六十四万一日六十四万二日六十四万三日六十四万四日六十四万五日六十四万六日六十四万七日六十四万八日六十四万九日六十五万日六十五万一日六十五万二日六十五万三日六十五万四日六十五万五日六十五万六日六十五万七日六十五万八日六十五万九日六十六万日六十六万一日六十六万二日六十六万三日六十六万四日六十六万五日六十六万六日六十六万七日六十六万八日六十六万九日六十七万日六十七万一日六十七万二日六十七万三日六十七万四日六十七万五日六十七万六日六十七万七日六十七万八日六十七万九日六十八万日六十八万一日六十八万二日六十八万三日六十八万四日六十八万五日六十八万六日六十八万七日六十八万八日六十八万九日六十九万日六十九万一日六十九万二日六十九万三日六十九万四日六十九万五日六十九万六日六十九万七日六十九万八日六十九万九日七十万日七十万一日七十万二日七十万三日七十万四日七十万五日七十万六日七十万七日七十万八日七十万九日七十一万日七十一万一日七十一万二日七十一万三日七十一万四日七十一万五日七十一万六日七十一万七日七十一万八日七十一万九日七十二万日七十二万一日七十二万二日七十二万三日七十二万四日七十二万五日七十二万六日七十二万七日七十二万八日七十二万九日七十三万日七十三万一日七十三万二日七十三万三日七十三万四日七十三万五日七十三万六日七十三万七日七十三万八日七十三万九日七十四万日七十四万一日七十四万二日七十四万三日七十四万四日七十四万五日七十四万六日七十四万七日七十四万八日七十四万九日七十五万日七十五万一日七十五万二日七十五万三日七十五万四日七十五万五日七十五万六日七十五万七日七十五万八日七十五万九日七十六万日七十六万一日七十六万二日七十六万三日七十六万四日七十六万五日七十六万六日七十六万七日七十六万八日七十六万九日七十七万日七十七万一日七十七万二日七十七万三日七十七万四日七十七万五日七十七万六日七十七万七日七十七万八日七十七万九日七十八万日七十八万一日七十八万二日七十八万三日七十八万四日七十八万五日七十八万六日七十八万七日七十八万八日七十八万九日七十九万日七十九万一日七十九万二日七十九万三日七十九万四日七十九万五日七十九万六日七十九万七日七十九万八日七十九万九日八十万日八十万一日八十万二日八十万三日八十万四日八十万五日八十万六日八十万七日八十万八日八十万九日八十一万日八十一万一日八十一万二日八十一万三日八十一万四日八十一万五日八十一万六日八十一万七日八十一万八日八十一万九日八十二万日八十二万一日八十二万二日八十二万三日八十二万四日八十二万五日八十二万六日八十二万七日八十二万八日八十二万九日八十三万日八十三万一日八十三万二日八十三万三日八十三万四日八十三万五日八十三万六日八十三万七日八十三万八日八十三万九日八十四万日八十四万一日八十四万二日八十四万三日八十四万四日八十四万五日八十四万六日八十四万七日八十四万八日八十四万九日八十五万日八十五万一日八十五万二日八十五万三日八十五万四日八十五万五日八十五万六日八十五万七日八十五万八日八十五万九日八十六万日八十六万一日八十六万二日八十六万三日八十六万四日八十六万五日八十六万六日八十六万七日八十六万八日八十六万九日八十七万日八十七万一日八十七万二日八十七万三日八十七万四日八十七万五日八十七万六日八十七万七日八十七万八日八十七万九日八十八万日八十八万一日八十八万二日八十八万三日八十八万四日八十八万五日八十八万六日八十八万七日八十八万八日八十八万九日八十九万日八十九万一日八十九万二日八十九万三日八十九万四日八十九万五日八十九万六日八十九万七日八十九万八日八十九万九日九十万日九十万一日九十万二日九十万三日九十万四日九十万五日九十万六日九十万七日九十万八日九十万九日九十一万日九十一万一日九十一万二日九十一万三日九十一万四日九十一万五日九十一万六日九十一万七日九十一万八日九十一万九日九十二万日九十二万一日九十二万二日九十二万三日九十二万四日九十二万五日九十二万六日九十二万七日九十二万八日九十二万九日九十三万日九十三万一日九十三万二日九十三万三日九十三万四日九十三万五日九十三万六日九十三万七日九十三万八日九十三万九日九十四万日
--	--

又國書卷之八 ^{74(五七九)} 田村の條に「半夏生に
限」とあり。又卷之九 ^{また(六六六)} に三伏の條ありと行事
に「いゝは記事なり。其申元は同じくは本書
に八月以降を欠いて居る。
又民間の令に北條岸と節分夜撒豆の條を
「アサニ」あり。夢田 ^{春に} 北條岸と節分の條に
は朔旦冬至の記事あり。
又民間の行事を小の報節の節日は御年とハナハ
夜と二日一日位しかたないか二の三の節日は
民間の百 ^姓 には忘れたるものありぬる。

又し年中行事の正には御年の外には大しと行
事あり。ハナハに便宜ありと云ふ事には
又。其他の報節いふ賑やかな神仏の行事には
用いられず。神祇の古一 ^例 祭日は旧
の月日又は何れの上とか甲乙かの十二支中の
何れの日と云ふ類が多い。

165

下賤の事は、いと奇かしげに
座多して休息し、二日、毒り
多禮に書さる。一、今日
六日あり、家に見せに戸を
あけ、戸はあけ、見せに戸を
あけ、今日、城下の警備せよ
年終の頃、家々、一、一、
鳥追と、非人若衆、一、一、
三、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、

正月 元日 毎家鶏鳴に若水を汲、
神棚の紙に供し、
城下にも武家にはかくのいとし、
いへど、高坊民家は若衆、
温食、
中平始、
相、
今朝より始、といとも

鑓 木 榮 太 郎 用 鑓 B5判

錢 用 郎 太 榮 泰 鈴 B 5 判

書名 朝鮮社会 (68)

原稿番号 : # 706-780

号数 : 9 本

字詰 : 字 × 行 × 段 ()

改丁指定 :

文撰氏名 : 朝日 (箱 分) 月 日

植字氏名 : (頁 ^{ハミダン} _ナ) 月 日

担当

27

錢 用 郎 太 榮 本 錦

鈴 木 榮 太 郎 用 箋

27

[illegible]

25

今宵
 常明
 見
 と
 と
 人
 晴
 晴

晴

酒菓
~~乃月欠んこへ~~
~~おまふ~~
~~見~~

子
 在
 勉

し 芽 玉 煮 上 月 に 備 可 し

九
月
九
日

電陽の佳節を唱ふ事は、竹葉に

10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527
 528
 529
 530
 531
 532

29

十五

月
~~日~~
 一
 月
 の
 こ
 と
 し

十
九
八

嘉永元年
正月
七日
一
七

月
 子
 子
 子
 子
 の
 こ
 と
 し

二十三

今夜二丁
夜待
上
家
心
心

こ
に
習
し、
二
階
を
抜
け
て

11
 或
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527
 528
 529
 530
 531
 532
 533

し
し
月
を
あ
す
し

二十

南竹雪堂記

十月
六日

今日より
中はより
十六日
晴直
江戸原の
澤土宗

亭に二
考多し
二水

ト
夜
と
い
あ

+	h
---	---

~~今~~ ~~合~~
~~夕~~ ~~夕~~
~~町~~ ~~町~~
二
二
~~二~~ ~~二~~
~~中~~ ~~無~~
~~院~~ ~~意~~
二
は
~~後~~ ~~後~~
を
~~被~~ ~~無~~

~~ア~~を
 とら
 ちの
 れう
 とい
 へ

祝う

124

B 5 判

鑄 木 菜 太 郎 用 鑑 B5 判

鈴 木 榮 太 郎 用 箋 B 5 判

信
Y41

[illegible]

本文より落す

80

(日本標準規格B列5判)

国立国会図書館

80

国立国会図書館

編者記 ① 本稿は草稿段階のものであり、当初はそれぞれ

独立した論文としてあつかわざるを得ず、系統的に整理し

得ないものと考えていた。ところが以下に掲載メモが出て

目されたことによつて、調査以前に7年中行事、社会学

的研究の主題として、左に示すような構想を持つて

あり、多くが未完のままに終わったものと解するに改

たので掲載する。

以下を参考に

1979

(日本標準規格B列5判)

年中行事の社会学的研究の主題

一 年中行事の共同圏

(文化圏決定の標識となる)

a 地域的 (文化圏の内題)

b 階級的 (家をもつて生活単位とするところでは)

c 職域的 (年令別・性別の分化は内題とならぬ。)

d 年令的

e 性別的

一 年中行事の存在理由
(制な慣行は年中行事によって更新される。)

a 伝統の更新

b 集団の更新 (同族、郷土人)

c 社交の更新 (贈答の意義)

d 休養娯楽 (体力更新)

e 時食と栄養

f 信仰生活 (神や祖先との社交更新)

一 日本・朝鮮・中国における比較

(節日、娯楽、脚戯、綱引、フランク)

祝祭・神事・家庭的・~~村落~~的)

一 年中行事の集団性

一 時間の観察

a 一代に一回 (大嘗祭)

b 年に一回 (神宮式年祭)

c 随時 (祈雨祭、落成式)

d 毎月反覆 (朔望祭)

e 毎日反覆 (朝夕奠)

年中行事の概略

一 算帳・勘定・決算

a 日本 — 正月と盆

b 朝鮮 — 大洞契、大晦日

c 中国 — 年羹、端午節、中秋節

一 襖被

一 年賀

一 贈答

一 知人結合更新

a 日本 — 正月 (舊暦) 盆 (忘年) 臘八 (湯州)

b 朝鮮 — 旧歲拜、新歲拜

c 中国

一 郷土交際遊楽

a 日本 — 氏神祭、寒風山ササナリ、

彼岸百万遍、寺院（七月三、四日）

十月六日、十一月二日

b 朝鮮 — 山神、秋典、端午、秋夕、

洗锄遊（朝鮮には郷土祭事は乏

し、が、郷土遊楽はあり）

c 中国 — 神、角力、鞆、娘々祭、

土地神祭、荆苳（九月九日）

一 親族結合の更新

a 日本 — 帰家に年賀、正月と盆、生

見玉、親へ酒食を贈る。

b 朝鮮 — 時祭、新旧歳拜、路上の会

見（八月）。

一 僕婢解放

一 休養（生業休止、市日）

一 家族結合の強化

下占、呪術、月祭、星祭、太陽祭、月

祭、寵祭、宅神祭、是祖祭、歳華

朝鮮にはト占の日が甚だ多い朝

鮮は家庭祭りと同族祭り。

一 郷土祭事

氏神・土地神・娘々祭、山神祭、秋典

寺院・朝鮮の虫切祭？

一 子供等の日

子供への注意の更新

一 老人等の日

老人への注意の更新

一 女の日

荆苙（七月七日）、元宵節（満州）

一 時食保健家事

五 菖蒲湯・清掃・薬製造・虫干

六 流頭・壁ぬり日

一 集団更新

秋典・祝祭（~~時~~享）・新歳拜

一 年占

一 農耕の時

農の重要時期の指示  二月九日植樹日

二月の驚蟄日は壁ぬり日・山の口あき

穀雨の日（満州）、八十八夜、二百十日

彼岸

5
183

書名 朝鮮社会 (49)

原稿番号：# 731-749

号数： 9ホ

字詰： 字× 行× 段()

改丁指定： R27

文撰氏名： 朝日 (箱 分) 月 日

植字氏名： (頁^ミダシ^ナ) 月 日

担当

22頁

3T

北海道瑞興郡月瀬里部落(草稿)

農村社会調査野帳抜書

三丁

一丁

9

12

9

8

V

V

()

5T

5丁

北海道庁管内

北海道庁管内

帯にはツレはあり。この帯の畑作地帯には故に

サーヤをまいる。盛夏の頃の畑作地帯には故に

のもあり。畑作のところで夏もすい多忙に

ある。田作のところで除草後収穫の自

ら物も長い暇あり。五月下旬の夏の

やかな行事あり。畑作のところで夏もすい

ある。旧九月九日(十月二十日)の秋祭

の祭りに休業して酒宴をほり牛なを

のも時向をとり仕事である。ピントクを作
るには炭火で庭を作る。手伝いに来て御馳走
を食うなり遊んだりする。にも人は余分に果
る。鶏も何羽か殺さぬ。薬酒も作られる。
部落外の者は来ない。

困る家のために近隣数戸のコジロウを行く場合
はよくある。コジロウは漢字では拳底と書く
のであろう。康本氏の説である。底は元の意
元は情に通ずるといふのである。
結婚式の時の援助
結婚式の時には部落の人ばかりの者ばかり
手伝いに来る。泊りこみである。二三日前
から夜昼なく御馳走の準備をする。女は夜
類の準備。男は御馳走を作る。栗の皮をむく

年 月 日

二
一
九
八
七
六
五

上
上
の
3
5
1
考
と
朝
鮮
に
お
け
る
お
お

は十数年前結婚年
今
か
上
昇
レ
始
め
乙
頃
一
時
出

産数 n 個分
低下に相違ない。
その

法
固
定
に
た
り
て
お
く
~~板~~
に
な
る
こ
と
か
ら
又
新
年

あ
ん
に
~~し~~
い
上
が
現
れ
る
の
う
ら
あ
う
う
わ

然レ
 是の
 爲に
 兵役の
 虞係
 あり
 又低下
 する
 下あり

[illegible]

一
 十
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

としに
ぬき
ぬきに
~~ま~~
まじり
す。
おの
い
は
く、

た
金
田
栗
山
は
、
自
分
か
三
十
位
に
な
る
家
内
は
了

かりお婆さんになつて
あゝいあゝしたのて

こねはいかんと
思つて龍縁にて
こまいましてた

と
あ
る
酒宴の席で事もなげに
いつ
て
けた

最
 近
 十
 餘
 年
 來
 は
 結
 婚
 年
 齢
 が
 高
 しく
 な
 る
 傾
 向
 有
 り

乙
男
丁
月
廿
十
日
生
孫
姓
可
丁
卯
年
己
巳
月

	た
	ん
	口
	二
	し
	一
	満
	二
	年
	回
	に
	子
	を
	産
	む
	孩
	に
	な
	う

七
 〇
~~八~~
 〇
 七
 一
 七
 六
 一
 二
 又
 早
 七
 〇
 一
 二
 七
 〇
 七
 〇
~~八~~
 七
 〇
 〇

微
苦
の
宮
施
に
保
フ
心
和
り
水
を
よ
め
る
事

鑓 木 榮 太 郎 用 箋

鈴 木 榮 太 郎 用 箋

鈴 木 榮 太 郎 用 箋 刊 行

鑓 木 榮 太 郎 用 箋 B 5 判

鈴 木 榮 太 郎 用 箋

錢 用 郎 太 木 鈴

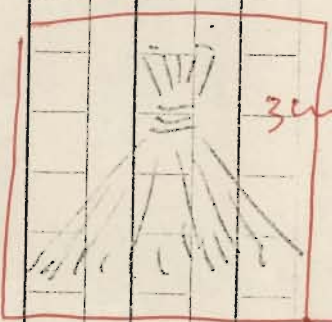
朝鮮社会 (50)

750~768

鈴 木 榮 太 郎 用 箋

鈴 木 榮 太 郎 用 箋

錢 用 郎 太 榮 本 鈴 . B 5 判

豊作、宋の都の宮の^{たの}殿の記印が来てある。わす
へ道に出を入れた記だ。こゝも記よりはずう
せである。オリーブは葉っぱをわすな宋の
屋敷の跡をしるしだ。

土地等は昔より代々の所有者が記つて^いく。
秘記の中はせいぜい百十萬でかくしておく位の
わけならぬに書を入れた所だ。土地所有の印が

鈴 木 榮 太 郎 用 箋 115 列

婦人の喫煙飲酒

四十才以上の婦人で未亡人になつて居る者

は、飲酒しても世人はとかぬといふ煙も同然

は、四十以下で飲酒したり喫煙する者は

遊女位である。四五十才の婦人で煙草を常用

して居るは一割に一人か二人かはあつた

といふ。一割の女子は煙草を吸ひないもの

のとされてゐる。

分家と分居

二三男は昔は結婚してゐるが分家して分居

してゐる。分家してゐるは二十才を過ぎ

てゐる。長男は男の夫婦は夫婦といふ

銀が同じである。家内やさい、家内は同じ

である。わさゝ家は長男夫婦は父母の夫婦と

同様にしてゐる。分家は財産が別の人には同

じである。財産が別、家内は大伴長男が

全部である。分家の家内は親が建て、

やつた。分家の家は二男の夫婦の建て

鈴 木 榮 太 郎 用 箋

764

てある、^イチ^キ（ワニガム）で唄ったものがある。
 毎年一回とりか^イ。
 家で用^イ。富んだ家ではモンソクの上
 に^イキを敷^イてある。
 寝具は博^イである。敷^イフトンは用^イす
 寝衣なし。服装としてはこの^イはケマカ短
 絨^イの^イも白製である。針^イか^イは^イ。
 購入するとい^イ。

イ

書 名 朝鮮社会 (51)

原稿番号 : # 769 ~ 780

号 数 : 9ホ

字 詰 : 字× 行× 段 ()

改丁指定 : 改訂

文撰氏名 : 朝日 (箱 分) 月 日

植字氏名 : (頁^{ヘミ}ダシ^ナ) 月 日

担当

朝鮮北部および西部の共同作業

郷徒

附近

（舊地位と
公署の現
在）

郷土軍

I. 明洞の共同作業

（とく）

（ヒンド）

郷徒と

附近

（附）

（附）

（附）

ここに昔からツレはない。ポマシもたま

にあり。余り多くない。農繁期には雇人夫を

入れる。比治には三食食はし、賃銀一日五円

位である。洞内は隣洞から、すきのあるい

人、人を雇うのである。昨年より学校児童動

員、遊人動員があり、農事を助けたので大

分助が、~~（？）~~。

共同作業班は各区の理事長の指揮による

盛んにや、~~（？）~~。耕地を平均して、~~（？）~~。

あ、~~（？）~~、あと、賃銀の増減を、市はな

。広い耕地の家も狭い耕地の家も、平

ぬ。男、女、老若皆出て働く。

無償銀力奉仕の慣行的制度と

附近にある。即ち、旧郷は旧郷の各戸が

奉仕に出る。制度である。奉仕は、家では

酒を飲まして、~~（？）~~。十歳以下の幼

人、場合によっては、行水、~~（？）~~。

ブグン、金、一、~~（？）~~の援助、受け、~~（？）~~。

郷土軍

員、遊人動員があり、農事を助けたので大

分助が、~~（？）~~。

共同作業班は各区の理事長の指揮による

盛んにや、~~（？）~~。耕地を平均して、~~（？）~~。

あ、~~（？）~~、あと、賃銀の増減を、市はな

。広い耕地の家も狭い耕地の家も、平

ぬ。男、女、老若皆出て働く。

無償銀力奉仕の慣行的制度と

附近にある。即ち、旧郷は旧郷の各戸が

奉仕に出る。制度である。奉仕は、家では

酒を飲まして、~~（？）~~。十歳以下の幼

人、場合によっては、行水、~~（？）~~。

ブグン、金、一、~~（？）~~の援助、受け、~~（？）~~。

あ。ポグンとは洞星の別名である。ポグン
 には今日いふ昔の尊皇の尊位、公家の位名か
 らい。明日洞は今部落聯盟をいふ二天に分
 れてく。村落形態においては明日洞は七部
 落相隣接して一大村落をなし、
 リ郡邑であるところであるが、明日洞は
 集落景観として、
 ポグンの尊位と公家とは今日の区名の
 にあるもの、
 部落の自治行政圏であ
 る。部落公家の区選挙は互選であるが、
 部落の自治行政圏であるが、
 部落の自治行政圏であるが、

れてくる。
 明日洞内の七附近
 北洞 三戸七戸
 東洞 五戸二戸
 水田洞 三戸八戸
 籃橋洞 四十戸
 三波洞 三戸八戸
 瓦堀洞 三戸六戸
 夜前洞 三戸八戸
 北洞以下は、明日洞は洞星、
 明日洞は洞星、

公の考選委員は四月の致誠のあを其日にその公
を決定する。例いふ。その時は公の考選
委員。公の考選委員に申請する。家か
い。尊位かをとり。各合は他にはない。尊位
は高きである。かう實際職務は公考かつとめ
るのである。附近をめぐり。場合には尊位公考か
中へとなる。

か指し示す。例いふ。尊位は何年か重任
する。か、公考は毎年交迭する。尊位は部族の
の一番の。人望者である。公考
は若くよく働く人である。例いふ。尊位は
部族として必要である。尊位公考による
部族の自治的な仕事は。例いふ。他にはない。
他部族との交渉。例いふ。尊位は必ずし
も儒生にはない。山神の一月と七月致誠の
例いふ。主として二人である。

手不足の田主が借金を出して
 労働隊に作業を依頼する。今、
 隊員は自家に耕地の少ない者の子弟が参加し
 三才より五才位の若者が多い。
 一時は順川郡でも郡庁の農業指導員が
 郷土軍の制を農民に紹介し、今は名の
 事もない。
 藍浦里では田植えの時には、昔から人夫を
 入れて、今、年がらまといひ、どうして
 やらうかと案じて、今、事にあつた。

平南順川郡仙沼面藍浦里鳳下洞大村におけ
る昔同作あとの即土軍
昭和群内には古くからワレは行はれず、70
までは行はれず。昔同作あては郡内では
一般に甘く行はれず。平島郡安良郡に
は十四日下り前まで即土軍と云う異業労働隊の
組織があらう。今ではない。即土軍は抱めて
規律正しい労働隊で、隊長の命令は絶対に通
守され、
気勢をあげ、道路に構はなく直線に進んで

9

北部朝鮮

B₂₄

西部朝鮮の共同作業

(草案)

- (一) 明川洞の共同作業とくに郷徒^{ヒヤド}と附近^{ブジン}に付^{ツキ}、尊位と公員
- (二) 平南順川郡仙沼面藍浦里鳳下洞大村における共同作業と郷土^{ヒヤント}軍

書名 朝鮮社会 (52)

原稿番号: # 781-800

号数:

字詰: 字× 行× 段()

改丁指定:

文撰氏名: 朝日 (箱 分) 月 日

植字氏名: (頁^{ミダシ}ナ) 月 日

担当

22 頁

0 12 4

19

90

10

120

朝鮮
甲申
行東
調査

(草帖)

19

→

20×10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

朝 鮮 年 中 行 事 調 査

堆肥の草は前年旧六月より八月までにか	月上旬より一月末まで	を加えて。また一年間の薪の運搬をする。(十二	を家から、畑まで運ぶ事。一反十五畝、牛糞	ら正月末までか肥料運搬の一番良い時。堆肥	地の作業は氷で出来ない。正月十五過ぎが	をやただけ十二月上旬より正月末まで。その	作業は野良で働く事は無いが、肥料の運搬	一月	明月川郡下雲面明月洞の事例

は	里	山	の	る	る	っ	メ	ク	た
雪	。	ま	人	大	。	て	ま	×	も
が	牛	で	の	家	平	山	で	に	の
大	で	一	山	族	均	に	運	入	。
体	運	里	の	の	一	集	へ	れ	山
降	ぶ	以	は	家	戸	め	る	7	か
っ	。	上	何	。	三	7	。	牛	う
て	一	の	人	自	百	あ	新	に	。
い	度	と	か	家	五	る	は	ひ	正
る	で	こ	で	の	十	。	陰	か	月
。	十	ろ	共	山	束	正月	の	す	の
極	二	も	同	あ	。	に	七	一	堆
寒	束	よく	し	れ	五	山	月	度	肥
。	半	あ	7	は	百	か	に	に	運
零	位	る	買	そ	束	ら	山	七	び
下	。	。	っ	の	も	も	に	×	は
二	旧	。	7	山	い	っ	行	より	う
十	正	平	銭	で	る	て	っ	。	ム
二	月	均	る	。	と	。	て	。	千
三	中	一	。	他	こ	束	銭	十	二

薪

人

食	1	十	正	薪	や	急	肥	度
に	て	五	正	運	う	急	料	以上
は	い	日	月	び	な	を	運	十二
あ	る	休	元	肥	け	要	搬	月
う			日	料	れ	する	は	始
ゆ	各	十	と	運	ば	仁	二	め
る	戸	四	大	び	氷	事	月	か
穀	で	日	晦	は	が	で	末	ら
物	や	の	日	牛	と	は	万	正
を	る	状	の	車	け	な	事	月
入	前	況	二	男	て	い	三	末
れ	氷	で	日	か	か		月	まで
焚	は	一	は	女	は	氷	に	
く		年	休	か	と	つ	及	
	十	の	み	男	て	て	ぶ	
そ	四	事	十	の	も	い	事	
の	日	を	四	み	運	る	か	
火	の	予	日		へ	向	あ	
の	晩	兆	十		ぬ	に	る	

場所	病	は	と	雑	大	紫	の	か
は	被	山	一	穀	抵	は	塊	た
牛	い	神	五	を	の	雨	の	ま
馬	で	の	日	入	永	、	色	り
か	あ	祀	前	れ	で	両	を	を
入	る	り	の	た	や	方	見	十
ら	山	祭	去	飯	る	の	て	二
な	神	り	日	は	こ	時	菜	個
い	は	の	を	祀	ん	は	ず	並
山	部	名	ト	祭	を	半	る	べ
	落	が	し	を		々	灰	る
牛	毎	致	て	行	タ	炭	色	翌
馬	に	誠	致	な	ル	の	の	日
か	あ		誠	い	セ	月	場	の
入	る	豊	を	そ	カ	色	合	朝
ら		年	行	ん	と	合	は	そ
な	致	の	な	を	い	を	日	の
い	誠	祈	う	飲	う	見	で	大
は	の	り	そ	福		る	り	
は	と	下	れ					

教	え	々	な	よ	部	祝	祭	祝	奥
目	る	。	と	む	落	文	官	文	深
前	。	回	な	。	肉	を	は	を	く
に	今	十	い	そ	の	よ	別	よ	清
部	は	戸	。	の	人	む	に	む	浄
落	豚	な	祭	は	長	。	な	。	な
の	。	う	物	自	老		く	大	山
者	酒	回	は	然	学		、	体	の
か	も	十	豚	に	肉		各	は	意
集	。	号	と	ま	の		戸	厄	神
ま		分	牛	ま	あ		主	祓	体
り		し	。	り	る		か	い	は
集		て	十	そ	者		一	。	何
会		献	マ	の	が		人		も
す		ず	と	た	代		一		な
る		る	煮	め	表		人		い
		。	た	の	の		行		。
		飯	も	酒	祝		く		
各		を	の	会	文				
戸		供	丰		を				

飯と鶏一羽おっ持つて行つて祀るところもある。
 致誠の時刻は朝であるが一般に正午位になる。
 祭物の準備する人は部落の有司がやる。祝
 文は二種ある。各戸主人のよむもの、代表の
 よむもの。
 祝文
 代表祝文を読む人は当日肉食せず。葬式の
 家に行かぬ。祭物の準備する人も然り。祭物の
 の用意する人は二名いる。任期一年としてき
 める。尊位、公員とそれという。この二人は

祭のこ
 とだけ
 ける。又
 長のほ
 か、
 にも今
 もある。
 一般部
 落の公
 事を
 名する
 のが例。
 尊位は
 何年も
 つづく
 が、公
 員は
 前任者
 が指
 名する
 のが例。
 尊位は
 何年も
 つづく
 が、公
 員は
 前任者
 が指
 毎年か
 わる。尊
 位は部
 落内の
 一番の
 人望者
 で
 高齢者。
 公員は
 若いよ
 く、幼
 く人。
 今の区
 長は
 行政的
 である
 が、部
 落の仕
 事はあ
 りずか
 ら他
 にもあ
 る。

シ	お	そ	か	シ	は	シ	お	子	子
会	祭	こ	や	そ	は	その	は		
員	に	か	る	の	れ	神	ま	左	そ
の	行	ら	が	場	る	聖	マ	木	の
選	く	各		所	か		ア	は	下
挙	は	戸	寒	で	入	な	ア	標	位
は	男	に	い	そ	れ	範	い	準	の
正	の	合	か	の	な	圍	る	に	と
月	め	け	ら	場	の	は		切	こ
の		ア	公	で	で	神		る	う
致		や	員	簡	あ	城		た	
誠		り	加	単	る	と		け	祭
の			肉	に		し			壇
あ		各	等	飲		ア		教	は
と		戸	を	福		は		百	平
そ		で	衣	を		な		年	ら
の		飲	に	各		い		前	に
日		福	運	戸				より	ア
に		す	び	主				先	
次		る		人		牛			
						馬			

決める。公員の定員集まる。公員も

の公員を中流以上の家。尊位が主になる会合
は他にはない。尊位は高年であるから実際に
は公員加やる。

十二月末日は飲食物の準備して食べるだけ、
別に行事はない。

十四日夜は各家に火をつけて寝ない。子供

も寝せぬ。眠ればまゆか白くなる。魔よけの

ためである。(二人は京域では十二月一日、こ

「シラ」

こ、では正月十四日夜。大体事変前までやった
 か、今はやっていない。やっていゝ人もある
 十二月末日は事変前までは旧歳様はやった
 が今はやらぬ。年上者に対して新年をよく迎
 えよう。に挨拶すること。食物などせぬ。
 除夜の行事。その夜は毛午などあるから祀
 祭をやる。家に行事はない。
 元日は何もなし。御馳走を食うだけ。新歳

正朝茶禮に不可欠は白餅の汁トクク(ク)である。
 は御馳走が来たからついでに祖先を祀る。
 茶官にちくは茶禮は簡単である。正月
 くか泊りに行く。重要な分家の者だけが行く。
 本家加隣部落にあつても行く。夜中早く行
 文章家という。大文章家が宗家。
 は宗家に集まる。分家に対して大本家の事を
 に祀祭がある。夜一時頃。各戸でやる。分家
~~祀祭~~ 拜はあがあるが今はすたれた。美俗であつたが
 1 11 事である。十二月末日の深夜即ち元旦

廻禮

直^前後^{まで}連^は幾分あつたが今は全然なくなつた。事変

落内の年長者部落外の特別関係者年長者。常

に年長者に対して。家庭外では男、家庭内で

は女。男は家庭内も。禮をするだけ。その時

の挨拶の言葉は「過歳を安寧にすましましたか

という。

サル
ル
70
リ
は
元旦
ー
十五
日
ま
で
に
な
し。

後

の	は	の	十	書	立	正	必
算	子。	運	五	い	春	月	要
木	。	を	日	た。	の	と	に
に	諺	占	に	部	日	は	や
よ	文	う。	年	落		限	る
る。	の		占	内		ら	か
	解	今	い	の		ぬ。	ら
大	釈	も	さ	名		正	月
低	等書	二	や	筆		月	と
や	に	三	る。	に		と	き
っ	よ	人		書		ま	う
て	る。	は	氣	い		ら	
貰	卦。	あ	の	て		ぬ。	
う。		子。	運	も			
	金	土	。	ら			
	木	亭	個	っ			
	土	秘	人	て			
	水	訣	の	い			
	火	に	其	た。			

↑

✓

その下

10

15

用

~~十四日~~

の	サ	は	十	凶	方	穀	細	の	十
サ	は	な	五	作	沈	類	(五)	は	四
ウ	ない	日	を	み	も	の	と	神	日
ゴ		(ホ	意	方	一		い	氣	の
リ		ル)	味	を	つ		う	か	夜
巫	非		す	見	ふ			く	の
又	常	に	十	て	を			つ	五
は	に	は	四	占	器			く	穀
神	古	何	日	う	の			よ	飯
耳	横	も	に		水			う	に
に	敷	せ	や	沈	の			に	入
た	方	ぬ	る	む	中				れ
の	は			の	に			そ	て
五	あ	立		は	入			の	た
	っ	竿		よ	れ			算	く
	た	、		く	て			木	。
		横		な				の	入
	一	敷		い	浮			事	れ
	種	防			び			を	る

8

の	対	戦	投	巫	で	は	は	十
つ	抗	は	相	で	な	い	今	六
い	で	回	(十五)	な	い	る	い	日
た	や	十	行	い			な	の
タ	る	年	う	が	サ	読	い	5 鬼
イ		も		分	ル	(經)		神
マ	通	前		る	が	士	回	日
ワ	具	に		人	リ	は	十	は
で	は	あ	板	か	は	い	一	10 ない
た	夕	た	と	あ	巫	な	年	
た	イ		ひ	る	は	い	前	
き	マ		は		い		に	
合	ワ	(十五)	寒		な	神	な	古
う	に	夜	く		い	耳	く	く
	火	行	て		が	は	な	15 から
勝負	を	う	出		神	巫	っ	ない
負	っ		来		耳	的	た	
は	け		ぬ		か			
し	て	部			や	読	神	
り	火	落	炬		る	巫	耳	巫
						的		

読

は	男	月	こ	将	が	そ
な	も	を	の	の	や	く
い	女	は	時	記	か	者
。	も	い	健	念	れ	加
前	少	め	脚	今	ぬ	敗
に	し	て	を	で	全	で
当地	やる	見	い	も	心	あ
で	。	た	の	や	河	る
や	老	か	な	。	い	。
っ	幼	男	か	威	う	10
た	皆	の	め	興	大	服
。	やる	子	な	で	将	装
(今	。	を	加	は	あ	は
で	産	う	の	盛	っ	手
も	衣	や	悪	大	た	拭
中	政	る	厄	で	。	を
南	国	。	ふ	あ	そ	15
鼻	は	踏	せ	る	の	か
で	今	橋	ぐ	。	大	ふ
		は	。			る
						髪

七宝山
心寺
七宝山
心寺

節	コ	に	戸	は	ハ	寺	盛
今	ー	来	中	儒	日	ば	人
の	面	る	二	林	に	こ	に
時	七	不	戸	は	行	の	や
は	宝	定	行	行	く	附	る
何	山	期	く	か	男	近	
も	用	で		な	女	に	
し	心	あ	三	か	共	な	
ない	寺	る	四	つ	に	い	
	上		十	た	行		
	雲	こ	年	昔	く	遠	
	南	こ	前	は		く	
	面	より	より	男	儒	に	
	の	七		も	林	あ	
	寺	里	僧	行	も	る	
	洞	半	が	か	行	か	
	の	の	鈍	ぬ	く	ら	
	百	上	鈍	百		回	
	鹿			昔		月	
	寺						

互	下	下	北	理	か	に	二	二	二
屋	坪	雲	し	自	ら	寒	月	月	月
は	洞	面	い	家	一	い	に	事	は
西	に	に		で	般	屋	寒	正	
角	い	カ	肥	や	に	根	食	月	
百	る	ヶ	料	る	寒	葎	あ	延	
六	二	屋	運	食	食	か	れ	長	
洞	三	石	搬	は	三	き	は		
に	戸	隔	等	以	月	改	鋤	二	
昔	は	洞	あ	入	造	は	に	新	
か	昔		る	竹	農	田	に	い	
ら	か	成	か	糖	肉	に	め		
あ	ら	洞	う	等	の	末	を		
ッ	面		い	を	時	る	や	仕	
た	肉	明	そ	作	の	の	る	事	
(約	に	川	か	る	新	具		は	
甲	あ	洞	い	新	合	修	非	た	
位)	ッ						常	い	
	た								

分
青
龍

書名 朝鮮社会 (50)

原稿番号：# 801~820

号数：

字詰： 字× 行× 段 ()

改丁指定：

文撰氏名： 朝日 (箱 分) 月 日

植字氏名： (頁^{ヘミダシ}ナ) 月 日

担当

す	部	年	介	食	寒	王	行
事	落	前	子	わ	食	通	事
は	行	の	推	ぬ	と	い	明
な	事	事	の	事	し	て	と
い	は	。	古	が	て		寒
	な	二	事	あ	古	祝	食
主	い	月	に	っ	同	祭	は
人	。	中	よ	た	と	と	同
か		に	る	か	し	墓	一
休		休			て	詣	また
む	解	め	冷	今		り	は
日	約	の	や	は	火		一
に		日	飯	そ	を	墓	日
は	二	は	食	人	た	の	違
モ	月	清	わ	な	か	脩	い
ス	一	明	ぬ	事	ぬ	繕	
も	日	寒	の	は	冷	を	清
休	に	食	は	し	や	や	明
む	休	い	数	な	る		寒
	ま	け	百	い			食

秋

う。	会	十	の	千	百	秋	は	祭	啓
儒	員	田	祭	坪	五	典	な	祭	
道	が	。	典	か	十	の	い	の	
会	参	そ	費	あ	名	事	。	目	5
で	会	れ	は	る	。	二	虫	に	
講	一	で	道	。	回	、	か	は	
演	て	秋	で	毎	二		蘇	節	
会	盛	典	き	年	月		生	儀	
も	大	費	め	二	と		す	と	10
や	に	に	る	千	八		る	し	
る	行	は	。	四	月		日	て	
。	う	回	昨	位	。			日	
	。	回	年	の	今			か	
会	自	に	は	收	郷			あ	
の	今	な	春	入	校			る	15
保	は	ら	秋	か	財			だ	
管	不	ぬ	二	あ	産			け	
は	満	。	回	る	六				
郡	と	恭	で	。	万			行	
で	い	聖	九	春	四			事	

日	垂	る	設	三	そ	少	春	や
で	献	人	飲	百	の	限	秋	る。
は	は	は	福	円	前			
午	一	育	は	位	ま	多	の	自
の	番	や	明	倫	で	い	祭	令
十	の		儒		は	時	典	達
時	人	知	堂		牛	は	費	は
頃	物	人	で		も	千	は	九
		の	や		殺	円	実	十
	終	家	る		し	以	際	回
	献	に			た	上	は	以
	は	泊	永				二	外
	人	る	の		豚	去	回	は
	物		外		一	年	で	知
	また	郡	で		頭	も	下	う
	は	守	も		で	豚	八	ぬ。
	真	か	や		二	も	百	
	員	初	る		百	殺	円	
		献			斤	し	で	
	今		中		で	た	最	

五 十 名 の 選 考 委 員 と 選 考 員 一 人
 五 十 名 の 選 考 委 員 と 選 考 員 一 人
 各 面 事 務 所 に 集 ま る
 選 考 員 は 三 年 毎 の 一 月 に 各 面 に お け る
 春 の 献 官 式 毎 月 一 日 と 五 日
 加 や る 焚 香 式 毎 月 一 日 と 五 日
 三 年 毎 の 真 員 は 任 期 一 年 の 真 員
 あ る 以 上 四 名 位 掌 議 は 十 名 (各 面 一 人)
 被 選 考 員 は 七 献 官 式 毎 月 一 日 と 五 日
 約 一 月 前 に 明 儒 堂 で 役 員 の 選 考 の 会 議 が あ る
 倫

現 在 の 儒 林 は 儒 道 漢 学 を 学 ん だ 人 の み 。 漢 学
 の 本 来 ぬ 人 は 入 り ぬ 。 入 り ぬ 。 入 り ぬ 。
 も せ ぬ 。 家 柄 に よ る 。 西 班 加 標 準 。 西 班 加 標 準 。
 無 学 は 入 り ぬ 。 郡 内 兩 班 で 漢 学 の 本 来 る の は
 二 三 十 名 地 は 家 柄 で 入 る の 祭 は 前 日 か ら
 春 に 泊 り 齋 戒 す る 。 大 政 は 前 日 より 火 と
 も す 。 十 五 日 秋 典 。 そ の 後 総 会 。 秋 も 臨 時 総
 会 か あ る 。 總 会 後 飲 礼 。
 希望者だけ教人てやっ
 儒林の者、郡守の

す る と	か $\frac{1}{4}$	作 物。	年 交 替	め る。	て 麦 を 種 く。	ㄣ 昨 年 の	三 月	か ら の 話	講 演 等 か あ る。	5
播 種 す る。	大 田 は 主 と 一	各 戸 平 均 耕 地 二 十。	今 年 麦 な ら 来 年 粟。	麦 の 作 付 は 各 戸 と も 多 い。	三 月 に 寒 食 か あ れ ば	秋 耕 を や つ た と こ ろ に 少 し 欠 を 入 れ	(旧九月頃、収穫の直後)	勤 農 の た め の。	10	
三 月 末 四 月 上 旬 に か け て 苗	粟 と 麦。	大 豆 は 麦 か 発 芽	こ こ で は 重 要 な	麦 と 粟 と 一	は 少 し 欠 を 入 れ			新 制 に な つ て	15	

4 三 月 三 日 に は 何 も せ ぬ 祀 祭 も せ ぬ 上 社	行事	寒	苗	坪	一	町	に	が	代
		い	代	に	ル ル	六	よ	し	の
		か	で	植	カリ	ル ル	っ	い	準
		ら	ない	え	二	かり	て		備
		四		る	日	で	差	一	
		下		苗	か	約	等	ハ	立
		五		の	か	十	ル	ル	夏
		月	各	作	る	二	あ	カ	の
		に	戸	る	る	日	る	リ	前
		な	で	の		か		の	に
な	や	に	苗	か	二	麦	終		
っ	る	二	代	か	日	の	る		
て		三	を	る	位	播			
か		日	つ	く	か	種	三		
う			る	る	か	に	月		
			の	の	る	手	は		
			に	に	各	の	相		
			は	楢	戸	取	当		
			下	種	ニ	水	い		
			千	は		方	そ		

次のページ
を入れる

を 用 う る	農 事 は 比 較 的 楽	農 事 は 麦 と 粟 の 除 草	四 月	各 戸 で や る だ け で 本 家 に は 集 ま ら ぬ	寒 会 に は ヨ モ ギ 餅 を 各 戸 で 作 る 祝 祭 は 朝 行	十 二 月	三 日 祈 る の 事 な し	敬 老 会 も な い	敬 老 会 は	祀 る 事 な し	日 と は 名 だ け
各 戸 の 陰 菜 は 教 坪 内 外	肥 料 は 自 宅 の 糞 灰	野 菜 の 除 草				三 月 中 に 特 に 作 っ て 食 う も の は な い				花 苗 は や ら ぬ	何 も せ ぬ
											苗 代 を 作 る 時 に 神
中 春 に	人 糞 等	加 肥									

次の頁の指巻の
とこへ入れる

2下

●道路修理は新四月と新丁月頃

●地積は一日耕ハカリ(千坪)で麦一石五

斗(搗く糸のもの、^{五升}搗けは四升になる)

●ハルカリ

●百坪は一負(ハンジム)という。麦に大豆

の同作をやる。大豆が一ハルカリで二石五升

●非農家へ野菜作り(か太郎あり。全部で十

二、三町歩。二二クを作る。野菜を曲石市と

千部者がある。営業的人は千部以内。昔

から野菜の(△△)かあった。明治(△△)にう

●ニニニ(△△)の適地はここである。そのた

め昔からある。反当収入は二斗が多い。他

り倍以上の収穫になる。明治(△△)は二百人十

位。

●旧三月雪解のあと井戸(すく)で、共にやる

●記はない。



説 僧が 法 す する	は	あ	か	る	相	フ	は
家	自	る	ぬ	も	当	ベ	山
で	分	。	も	の	盛	リ	菜
炊	の	仏	の	で	ん	ハ	を
い	祈	像	は	あ	て	ハ	多
て	願	の	何	る	あ	ハ	く
も	を	沐	も	。	っ	ー	用
衆	す	浴	せ	男	た	仏	う
に	る	。	ぬ	も	。	誕	。
説	。	そ	。	女	十	祭	特
教	末	れ	お	も	年	の	に
す	を	を	寺	寺	前	事	多
る	も	見	で	詣	ま	を	い
。	っ	物	は	り	で	そ	の
報	て	す	沐	す	。	う	は
で	行	る	仏	る	今	い	わ
は	き	。	の	。	は	う	ろ
な	。	お	行	寺	微	。	び
い	世	寺	事	に	々	前	。
。	話	で	が	行	た	は	

今	特	里	か	ま	か	の	る	い	祈
は	定	。	本	ぬ	今	あ	。	。	子
そ	の	お	物	。	は	事	祈	祈	の
の	僧	寺	あ	お	な	も	子	子	祈
家	と	に	寺	寺	い	な	の	の	り
は	契	は	詣	で	。	い	ん	た	も
三	約	泊	り	燈	ハ	。	め	め	女
百	し	る	は	を	り	前	に	に	か
束	ア	宿	と	あ	ル	は	岩	寺	や
以	ハ	か	ま	け	の	ハ	に	に	る
外	ハ	あ	り	る	日	リ	祈	女	。
に	。	子	か	。	は	ル	る	か	七
た	そ	。	け	吊	休	に	事	行	星
て	の	檀	で	燈	み	花	は	く	園
る	僧	家	行	と	。	煎	な	人	は
事	の	は	く	い	事	餅	い	も	こ
に	家	寺	。	う	変	か	。	た	こ
な	に	の	往	。	後	あ	巫	ま	て
っ	泊	内	復	。	は	っ	に	に	は
て	る	の	七	。	休	た	た	あ	な

に	し	五月	で	は	か	こ	な	い
祭	田	植	か	極	ら	の	い	る
は	畑	植	せ	め	寺	辺		
全	の	か	く	て	の	で	前	寺
然	除	初		す	役	は	は	に
な	草	ま		い	さ	田	多	は
い		る			す	田	か	一
	蚕			そ	る	で	つ	ニ
田	の			れ		な	た	名
植	飼	田		で	報	い		位
植	い	植		托	酬		今	し
に	は	あ		鉢	と	僧	は	か
は	い	の			し	は	殆	僧
つ	め	あ		頌	米	寺	ど	檀
レ		と		末	を	の	檀	家
は	田	の			貰	財	家	も
な	植	農			う	産	は	ち
い	植	休		檀		が	な	の
	の	み		家	そ	あ	い	か
昔	時	な		等	れ	る		い

な	れ	が	祭	の	員	も	今	農	か
ど	を	全	の	あ	が	雇	は	事	ら
に	附	部	時	い	あ	う	賃	に	な
も	近	落	に	た	っ	か	銀	も	い
附	と	民	や	人	た		一	余	
近	い	を	る	を		昨	日	り	た
を	う	率		雇	隣	年	五	マ	ま
や		い	病	う	洞	か	円	シ	に
る	今	て	人		又	う		な	マ
	で	除	で	郷	は	学	三	し	シ
四	も	草	困	徒	洞	校	食		は
下	や	な	る	無	内	見	食	雇	あ
五	る	と	家	賃	か	童	わ	人	る
名		や	の	銀	ら	動	し	夫	が
で	家	っ	た	力	雇	員	て	と	あ
や	の	て	め	奉	う			入	ま
る	新	や	に	仕	一	遊	洞	れ	り
場	築	る	尊	は	寸	閑	内	る	な
合	の		位	四	手	人	の		い
も	時	そ				動	人		
あ									

ン	脚	に	行事	と	か	時	の	る
コ	戦	墓	端	は	命	何	時	十
を	(ア	祭	午	関	じ	か	は	才
や	シ	を	に	係		困	ヒ	以
る	ズ	墓	は	し	公	る	中	下
	モ	で		な	員	時	ド	の
脚	ウ)	行	四	い	が	や	は	死
戦	た	う	五	が	実	ら	や	人
は	ま		六		際	る	ぬ	の
各	に	六	の	近	に			時
個	弓	日	三	く	指	最	家	も
人	術	は	日	に	揮	大	の	フ
で	を	娛	休	お	す	規	建	グ
や	行	楽	ま	れ	る	模	築	ン
る	う	の		は		の		で
		遊	四	親	附	時	病	や
ど	女	び	日	同	近	は	人	る
こ	は		か	族	は	尊	あ	
か	フ	男	五		同	位	る	そ
の	う	は	日		族			



が、
 他に
 にも
 臨時
 時に
 やる
 時
 か
 ある
 事
 変
 に
 な
 っ
 朝
 十
 時
 頃
 か
 ら
 五
 時
 頃
 ま
 で
 端
 午
 に
 は
 毎
 年
 や
 る
 の
 会
 長
 な
 と
 も
 そ
 の
 時
 に
 出
 来
 る
 有
 力
 者
 か
 な
 る
 脚
 戦
 と
 は
 角
 力
 の
 事
 数
 千
 名
 集
 ま
 る
 脚
 戦
 大
 会
 洞
 に
 は
 十
 一
 里
 (地
 面
 の
 も
 の
 も
 あ
 る
 が
 参
 加
 す
 る
 賞
 品
 は
 ず
 づ
 洞
 外
 官
 公
 署
 等
 か
 ら
 出
 る
 明
 川
 主
 催
 者
 は
 明
 川
 洞
 の
 商
 人
 組
 合
 (市
 民
 会
 が
 や
 る
 行
 く
 五
 人
 板
 の
 上
 1
 人
 は
 場
 で
 き
 め
 る
 若
 男
 女
 皆
 見
 物
 す
 る
 勝
 った
 者
 に
 順
 次
 か
 っ
 て
 中
 心
 部
 落
 で
 や
 る
 参
 加
 者
 は
 沢
 山
 見
 物
 人
 も
 老

予己	草葉	各戸	蒲湯	熱望	期 し	は	ら	附	て
染	(ヨモギ)	で	は	し	同	に	に	近	か
は	モギ	作	用	て	い	も	行	見	ら
ない	松	る	い	い	る	怪	く	物	や
	の		ぬ	る	我			人	ぬ
	実皮	一			露	す	フ	は	女
	写	日	醬	事	店	る	ラ	男	の
	を	で	油	変	も	事	ン	と	
		出	作	後	沢	は	コ	女	フ
	い	来	り	は	山	あ	に	と	ラ
	た	る	は	四	来	る	も	角	ン
	餅		四	五	て		賞	カ	コ
	をつ	端	月	六	い	医	品	や	は
	く	午		日 休	る	者	か	フ	角
		の	作	ま	今	か	あ	ラ	カ
		即	る	ぬ	住	き	る	ン	の
		馳	だ		民	て		コ	場
	家	走	け		は	待	主	ど	所
	で	は		葛	は	催	ち	の	

神	下	位	一	獲	め	至	六
祀	旬	も	ハ	は	て	四	月
り	田	つ	ル	三	少	回	
も	草	て	カ	月	教	行	収
た	取	い	リ	中	う	う	獲
い	り	る	の	旬	明	ニ	田
			麦		川	回	の
伏	は	上	の	す	洞	加	除
も	何	旬	収	ぐ	て	多	草
や	も	田	獲	脱	ニ	い	六
ら	せ	草	は	穀	十		月
ぬ	ぬ	取	一		戸		一
			日	秋	足	取	七
大	祝			の	う	り	月
も	祭	中	牛	菜	す	養	二
食	も	旬	は	畑		蚕	回
わ	せ	麦	農	の	麦	家	三
ぬ	ぬ	の	家	播	の	は	回
		収	の	種	収	極	た
川	田	獲	四	合			

四合の一

方	山	う	値	八	各	七	月	新
は	山	山	が	月	戸	水	は	び
大	神	を	少	に	自	田	何	も
体	祭	ま	く	入	家	と	も	な
冬	は	つ	な	る	の	粟	ない	い
の	七	る	る	と	時	の		
時	夕	事	葉	落	除	草	伏	の
と	の	は	が	葉	上		時	に
同	日	な	つ	し	旬		餅	を
い	か	い	い	か	頃		食	う
	そ		た	け			家	も
男	の		ま	て			あ	る
も	前		ま	い			る	
女	日		の	る	中			
も	に		新	の	旬			
行	や		で	で	より			
く	る		あ	新	新			
			る	の	伐			
女	祭		か	価	り			
は	り							

七、八月。サ新伐りは
八月月上旬まで。堆肥の草採り。乾草製造。

外 にはない。 午前中に至誠はある。 白中は何もない。 寺
 やった。 午前中に至誠はある。 七夕の行事は
 一日休み。 去年の夏もやった。 こん度の春も
 一度 ~~で~~ 酒もある。 山での一部肉は煮る。 至誠日
 ぬ。 酒も多く。 は用いぬ。 おみき頂くだけ。 福
 っ。 帰る。 その ~~に~~ 用いて。 飲福する。 大部令は持
 令 け。 分けて。 永に令けて。 永に令けて。 永に令けて。
 っ。 食う。 肉は生と煮た。 ~~も~~ 平 ~~分~~ づ。 各々。 各
 肉 も。 ち ~~に~~ 行く。 飲福は山で来た者全部が集ま

7411
6cm

6cm

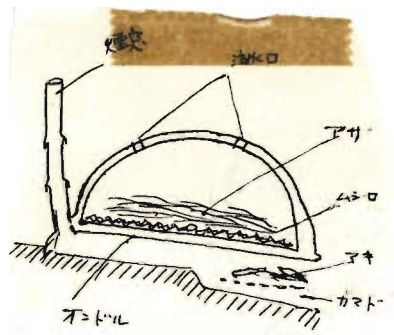
38



ま	上	八	く	て	共	く	麻	で
る	旬	月	麻	は	同	乾	も	も
栗	は		除	な	で	か	何	
	新		草	い	あ	っ	も	
来	伐		の		す	て	ない	5
	の		あ		時	て	い	
毛	仕		と		は	東	白	
口	事		時		新	に	中	
コ			は		か	す	場	10
シ	秋		残		安	る	も	
	夕		り		く		ない	
大	前		は		か	それ	洗	15
豆	後		春		か	か	鋤	
の	より		の		る	セ	宴	
順	収		て		釜	月	は	
序	穫		な		で	の	ない	
で	か		時		あ	仕	い	
あ	始		に		す	事		
る			つ		の			
			て					

カット 別紙①

820



書名 朝鮮社会 (54)

原稿番号：# 21-280

号数：

9ホ

字詰： 字× 行× 段()

改丁指定：

文撰氏名：朝日 (箱分) 月 日

植字氏名： (頁^ヘミ^ミダ^ダシ^シナ^ナ) 月 日

担当

や	に	一	秋	三	月	く	大	早	大
子	秋	日	夕	回	は	。	豆	く	豆
。	の	休	、	月	非	秋	か	収	は
フ	事	業	基	で	常	陽	九	穫	九
ラ	の	。	祭	あ	に	の	月	を	月
ン	事	非	を	る	多	収	中	要	に
ユ	の	常	朝	。	け	穫	旬	す	入
、	シ	に	の				頃		
角	と	多	内		一	モ	ま	箱	。
カ	は	け	に		年	ロ	で	は	10
は	い	の	に		中	コ	来	下	栗
や	わ	人	や		一	シ	の	旬	は
る	ぬ	は	る		番	は	刈	よ	中
が	か	遊	。		多	八	入	り	下
	そ	は	永		け	月	れ	九	旬、
	の	ぬ	族		は	下	が	月	15
端	類	。	金		八	旬	終	上	同
午	の	こ	部		九	頃	る	旬	の
の	事	の	行		月		と	迄	た
時	を	時	く		と	ハ	す	。	あ
の									

ㄣ	た	た	ㄣ	九	終	各	作	三	様	よう
た	い	い	農	月	日	戸	る	々	に	
月	。	。	事		能	令	。	伍	集	
重	そ	。	。		ふ	け	。	々	団	
陽	の	。	八			る	。	で	の	5
祀	地	。	月			。	。		に	
祭	の	。	の			多	殺	部	は	
も	作	。	收			々	す	落	や	
な	業	。	獲			で	。	内	う	
い	は	。	運			あ	。	で	ぬ	10
。	な	。	搬			る	。	角	。	
	い	。	の			。	。	力	非	
秋	。	。	継			暇	一	と	常	
社		。	続			か	頭	ア	に	
日	非		。			な	買	ラ	15	
も	常		。			い	っ	ン	師	
な	に		。			。	て	コ	馳	
い	け		。			そ	そ	。	走	
。	い		。			れ	れ	。	を	
收	。		。			で	を	餅	作	
獲			。					を	り	

上旬より粟、	十月	行	を雨	帰る	位土	時亭	は末	木に	祭は
来、		う。	れ	来る。	の	亭	ま	につ	ない。
大豆の		う。	とい	重陽の	ある	は	で	けて	5
脱穀が		う。	う。	事	墓	は	非	さす。	それ
始まる		う。	墓	は	もある。	十九	常	十月	以後
十一		う。	墓	は	地	日	に	の	も
		う。	墓	は	地	に	や	行事	ない。
		う。	墓	は	地	に	中	で	福
		う。	墓	は	地	に	も	ある。	積
		う。	墓	は	地	に	十九	九月	の
		う。	墓	は	地	に	十九	九月	上
		う。	墓	は	地	に	十九	九月	に
		う。	墓	は	地	に	十九	九月	モ
		う。	墓	は	地	に	十九	九月	千

農事は十月のついき。十一月十一月十二月にか	十一月	東	で	は	作	を	四	小	月
			そ	昔	る	い	月	の	一
			れ	か	他	に	一	時	は
			は	ら	に	る	に	で	い
			宗	や	は	祭	檀	あ	ま
			家の	ぬ	つ		家	る	て
			事	忌	く	休	祭	時	大
			で	祭	ら	ま	上	亭	豆
			一	を	ぬ	ぬ	山	は	ハ
			般	行	男	各	神	こ	一
			は	う	女	戸	を	こ	者
			祖	は	共	で	や	で	お
			文	両	に	や	る	は	く
			ま	班	や	る		余	れ
			で	は	る		檀	り	る
				高	餅	食	家	や	相
				祖	時	た	の	ら	当
			娘	ま	亭	け	死	ぬ	多

日	は	土	搬	極	十	二	以	新
を	別	地	出	寒	二	月	は	運
定	に	の	か	で			ま	搬
め	な	凍	あ	あ			だ	十
て	い	結	る	る			作	二
作		は					ら	月
る	十	十	仕	仕			ぬ	一
り	二	一	事	事				月
で	月	上	は	も			至	迄
は	は	旬	相	も			冬	
な	即	か	当	来			に	地
い	馳	ら	あ	ぬ			祖	に
穀	走	寒					祭	仕
類	は	食	狐	新			を	事
か	食	す	狐	運			行	は
多	う	て	狐	搬			う	な
い	か		狐	穀			小	い
			狐	物			豆	
	別	遊		の			力	縄
	に	戯						や

20

84

5

10

15

一戸三々

正月

順

川郡仙沼面

の事例



元

日

より

十五

日

迄

事

変

前

に

は

遊

んで

いた。

今

は

元

日

と

十五

日

の

み

休

ま

入

造

り、

と

作

る。

十五

日

以後

昔

は

縄

な

ひ

ワ

ラ

ジ

農

具

の

修

理。

二

月

三

月

蒙

細

工、

三

月

は

地

凍

結

て

い

る。

元

日

は

朝

早

朝

祖

先

祭

神

位

を

置

し

も

と

は

脈

を

用

い

た。

各

戸

に

合

け

る。

た。

十

五

日

ま

で

つ

い

け

て

用

い

た。

朝

飯の扱親

二三頭殺し

祭物を供す。

三月中旬まで

ワラジ造り、

ワラジ



大	親	各	の	い	た	頭	市	あ	せ
体	の	村	主	っ	。その	民	は	れ	き
正	事	に	な	た	。その	と	大	ば	廻
月	を	割	予	。部	の下	も	村	各	り
十	会	り	定	落	に	い	よ	戸	す
日	議	あ	行	会	里	つ	り	全	る
前	し	て	事	は	任	た	合	部	。
後	た	を	も	里	が	大	村	に	ニ
に	。	。	。	首	あ	村	長	ま	三
や	そ	そ	会	の	っ	。	は	わ	年
っ	の	の	議	家	た		里	る	前
た	会	運	事	に	。		首	こ	よ
	議	搬	項	集	里	に	介	こ	り
日	を	の	は	ま	任		川	は	す
露	里	事	郡	っ	は	頭	郡	五	た
戦	会	を	の	た	執	民	は	十	れ
争	とい	会	穀	。	事	か	尊	戸	た
前	った	議	倉	一	と	あ	位	。	年
ま	た	又	。	年	も	っ	。	。	上
で	。	戸	。				た	。	

レ

✓

五	か	を	か	そ	て	か	大	又	の
り	や	や	や	ん	一	り	本	そ	時
に	子	子	子	か	番	。	家	の	は
た				ら	大	寒	で	本	い
こ	月	男	事	小	き	食	は	家	つ
を	を	の	変	に	い		飲	に	も
あ	先	知	後	行		端	福	順	し
げ	に	識	は	く	寒	午	は	々	か
る	見	者	や		食		あ	に	り
	た	か	う	祖	。	秋	る	行	
一	者	や	ぬ	先	秋	夕		く	分
年	が	子		祭	。		元		家
の	男			は	朝	元	日	順	の
厄	子	十	郷	男		旦	の	次	者
除	を	五	団	に	永	が	朝	大	は
の	う	日	遊	け	で	祖	も	本	そ
文	あ	月	ひ		や	先	大	家	の
字		迎	す	相	っ	祭	体	に	本
を		え	う	を	っ	と	に	行	家
か	十	女	く	女	て	し	し	く	

本家
 祖
 祭
 に
 ま
 に
 あ
 る
 と
 する。

氷

産

48

ふ	温	ニ	凍	飯	や	げ	で	い	
く	湯	キ	種	の	を	る	る	ま	て
う	の	ビ	あ	中	軒			れ	あ
め	中	カ	る	に	の	水	十	る	け
はい	に	う		埋	教	神	五	る	5
雨	つ	の		め	だ	祀	日	厄	
り	け	中		る	け	り	の	被	夕
月		に			の		夕	い	コ
は	翌	十	豊	凶	田	紙	食	に	の
雨	日	二			田	に	の	す	10
か	そ	佃	の	の	の	自	時	る	ぐ
多	の	の	占	田	も	分	に		下
い	ふ	豆	い	の	の	オ	男	に	
	く	を		を	姓	ブ	の	綿	
多	う	は	十	つ	名	シ	子	を	15
雨	み	さ	四	つ	を	も	が	つ	
で	方	み	日	み	か	澡	た	け	
は	を	一	に		い	夫	こ	て	
田	見	夜	行	川	了	金	を	そ	
が	て	中	う	の		を	あ	れ	

て	板	立	ぢ	等	見	に	の	行	よく
い	号	春	る	か	る	の	せ	う	く
た	に	の	一	あ	穀類	れ	て	灰	あ
	は	日	二	ん	類	て	十	を	来
	る	に	粒	ば	の	屋	四	ふ	、
		は	は	そ	つ	根	日	る	畑
	今	は	何	れ	ふ	の	の	い	作
	は	占	か	か	か	上	日	で	は
	や	い	あ	よく	入	に	高	ふ	雨
	う	文	る	あ	れ	お	い	る	な
	ず	字		来	て	く	と	い	く
		を		る	あ	事	ろ	お	て
	十	か		と	ん	も	に	と	も
	年	い		占	は	あ	つ	し	あ
	前	て		う	、	る	る	て	来
	後	大			粟		す	、	る
	ま	内		何	粒	十		、	
	で			か	、	五	その	器	人
	や	壁		ま	来	日	中	に	が
	っ					に			

	あ	る	こ	を	神	詩	字
	る。	と	の	正	正	人	の
		針	日	月	月	の	上
		で	女	上	上	詩	手
		も	は	子	亥	句	な
		り	針	の	の	う	人
		を	を	日	は	し	に
		さ	用	は	根	い。	た
		す	い	鼠	を		の
		い	ず。	の	焼	家	と。
		と		日	殺	に	
		よ	鼠	太	す	行	文
		く	の	意	意	事	句
		似	歯	を	で	は	は
		て	か	炒	あ	な	ま
		い	も	っ	る	い。	ま
		る	の	て			っ
		か	を	食	キ		て
		う	か	う。	ビ		い
		で	じ		う		る。

鳥	身	よ	一	三	屋	せ	で	作	二
か	は	く	日	月	根	ず	今	業	月
出	あ	遊	は	に	や	今	は	は	
て	子	ぶ	終	入	垣	は	大	菜	
か	鳥	各	日	つ	根	女	部	細	
ら	が	戸	休	て	の	も	分	工	
食	出	で	め	播	修	や	菜		
え	る	遊		種	理	る	細	肥	
は	前	ぶ	行		を		工	料	
年	に	ニ	事		始	以		集	
中	暗	三	は		め	作	以	め	
不	い	下	な		る	り	前	(牛)	
吉	内	家	い		馬		は	真	
銚	に	で	が		鈴	寒	女	等	
末	食	遊			暑	食	は	を	
	事	び	よ		と	前	菜	道	
	す	集	く		大	後	細	路	
高	る	ま	食		麦	より	工	な	
梁		る	い		は		は	ど	
で									

祭	一	近	流	つ	分	い	る	飯	
具	家 室	に	の	る	家	寒	る	も	
の	を	は	家		は	食		餅 餅	
汁	あ	な	だ	祝	本	朝	た	も	
置	て	い	け	文	家	早	べ	作	5
き	て		旧	は	に	く	る	る	
他	あ	附	<u>家</u>	読	行	家	と		
に	る	近		ま	う	で	皮	中	
用	り	の	家	ず	て	祀	膚	ミ	
い	は	部	廟		ま	祭	か	千	10
ず	こ	落	は	神	つ	し	か	は	
	の	に	こ	位	る		ゆ	た	
木	部	一	の	は		お	く	べ	
の	落	つ	<u>辺</u>	本	五	墓	な	ぬ	
神	で	あ	に	来	代	に	る	事	15
位	五	る	は	あ	邊 ま	ま	と	に	
あ	六		な	る	の	い	い	な	
る	戸	家	い	の	墓	る	わ	つ	
は	あ	廟		は	に		ん	て	
内	る	に	附	上	ま	新	て	い	

る	う	す	す	て	廟	家室 ^レ 灰	少	房
。	。	ま	す	祀	は	で	し	に
老	部	せ	す	る	な	。	有	柵
人	落	て	。	い	内	の	力	を
か	で	飲	一	高	。	房	な	お
祖	豚	福	場	い	そ	に	家	い
先	ニ	を	合	方	の	祀	は	て
の	三	や	に	か	基	る	そ	
事	頭	。	多	ら	の	場	う	夫
を	殺		く	順	子	合	式	妻
い	し	飲	墓	次	孫	は	は	一
い	て	酒	加	に	の	内	一	組
放	い	す	あ	祀	も	房	家室 ^レ	ず
え	た	。	ん	る	イ	で	に	っ
る	。	。	は	。	は	。	あ	仕
イ	静	昔		大	同	こ	る	印
も	し	は	そ	体	時	の	時	っ
そ	く	豚	れ	一	集	辺	は	て
の	に	を	算 ^ラ	日	ま	は	そ	あ
宴	や	用	を	で	っ	大	の	る

畑	に	屋根、	三	は	そ	寒	福	老	席
ま	全		月	な	の	食	に	若	で
で	部			い	時	す	加	皆	
運	野	垣			節	す	わ	行	山
び	菜	の			き	て	る	く	より
始	の	修			返	五	た		帰
め	種	理			し	六	け	寒	っ
る	子				な	月		食	て
	を	野			か	す	時	と	
四	種	菜			ら	す	亨	秋	は
月	く				種	す	男	夕	宴
の					く	て	角	は	は
中	堆	畑				千	は	女	ない
頃	肥	の手			清	ヤ	男	も	
ま	も	入			明	か	た	行	
で	掘				の	イ	け	く	子
つ	り	三			日	モ	で		孫
い	出	月			の	大	あ	女	の
く	て	中			行	豆	る	は	男
					事	を		飲	は
						播			
						く			

人	参	小	の	三	代	種	大
に	加	に	節	四	以	の	麦
け	し	人	旬	十	上	收	馬
が	に	か	に	年	の	獲	鈴
参		兩	は	前	墓	期	署
加	今	班	何	ま	祭	に	の
	は		も	で	を	比	播
今	参	二	せ	は	あ	す	種
は	加	三	ぬ	は	る	小	
役	し	十	家	花	十	は	一
員	な	年	で	煎	年	集	年
に	い	前	の	を	前	で	を
も		迄	祀	や	ま	あ	通
な	今	は	祭	っ	で	る	じ
ら	は	大	も	た	や	年	て
ぬ	祭	部	せ		っ	二	や
	官	分	ぬ	今	た	回	や
儒	に	親		は			多
林	な	典	登	上			吃
梨	る	に	録	已	昔	五	

典經記

けが置 ~~去~~ ト には 落 官 家 に
 祀る 飯 日 ヲ 親 書 からは 祭 官 とな
 の 供 へ ト こ 典 堂 か は 祭 官 とな
 こ 鶏 や 各 戸 は 大 書 堂 あ 官 今
 り 酒 で 土 行 書 堂 外 行 儒
 を 家 主 神 書 堂 林 人
 族 中 婦 祭 堂 契 人 人
 で 飲 祝 屏 月 いう 子 多
 福 行 立 三 今 昔 儒 生
 す 行 七 月 今 は こ こ 情
 子 主 祭 上 月 今 は こ こ 情
 こ 婦 祭 旬 の は こ の 祭
 の だ を の

5

10

15

屍 育 あ 三 事 洞 城 中 時
 体 戎 り 人 が 祭 度 に
 と 我 は 年 選 祭 祭 河
 見 祭 輩 定 物 祭 辺
 ず 官 執 事 人 牛 三 月
 夫 事 執 事 人 豚 十 五
 妻 近 事 子 酒 日 頃
 下 木 下 肉 執 事 年 祭 官 古 旦
 の 其 類 事 輩 官 は 文 廟
 下 壇 を 食 わ ず 人 の 庭
 作 日 は 沐 浴 も 人 の 庭
 教 百 教 百 教 百 教 百 教 百

を	や	単	一	け	め	事	本	る	年
祈	る	に	人	行	。	変	の	が	前
る	。	祭	は	っ	行	前	木	神	に
。	祝	官	行	て	っ	ま	、	位	植
祭	文	だ	く	集	に	で	神	と	え
官	を	け	。	ま	時	は	体	し	た
の	よ	か	祭	る	は	そ	の	て	。
名	あ	や	物	。	祀	こ	木	は	そ
だ	。	る	の	す	可	に	か	一	こ
け	一	皆	分	ん	は	行	ッ	本	に
か	年	は	配	だ	夜	っ	ナ	。	は
く	の	永	を	頃	午	て	ン	リ	人
。	豊	に	う	そ	後	や	ナ	ナ	を
何	作	帰	ける	こ	回	っ	ム	ン	入
人	と	っ	。	に	時	た	。	タ	れ
祈	罪	て	飲	部	頃	今	大	ン	ず
願	悪	各	福	落	祭	は	低	ナ	。
は	き	戸	は	民	官	や	松	ム	教
洞	事	で	簡	各	だ	う	う	は	本
祭				戸		木	。	教	あ

書名 朝鮮社会 (55)

原稿番号：# 861-860

号数：

9本

字詰： 字× 行× 段()

改丁指定：

文撰氏名： 朝日 (箱 分) 月 日

植字氏名： (頁^{ヘミダシ}ナ) 月 日

担当

し	芒	獲	四	祭	な	酒	の
せ	種	の	月	は	い	。	あ
ね	か	時	大	非	。	今	と
ば	こ	と	麻	常	回	は	祭
な	わ	同	の	に	人	祀	物
ら	か	程	播	最	祈	の	も
ぬ	ら	度	種	肅	願	人	も
。	十	。	一	も	々	あ	っ
高	日	苗	年	り	時	る	て
梁	目	代	中	で	典	か	行
栗	だ	の	の	部	の	と	っ
大	か	準	大	落	あ	う	て
豆	ら	備	多	中	と	か	祀
。	皆	。	忙	で	の	分	る
。	の	田	の	精	去	ら	。
。	畑	の	時	進	日	。	ぬ
。	を	す	。	す	こ	こ	そ
。	す	き	秋	る	の	焼	水
。	き	返	の	。	祭	城	は
。	返	し	收	。	。	紙	鶏
。	。	。	。	。	。	は	。

行	は	教	る	金	遊	る	夜	し
く	行	徒	。	の	び	。	も	。
人	く	は	即	あ	す	苗	寝	小
も		な	馳	る	る	代	れ	豆
あ	祈	い	走	種	日	も	ぬ	綿
る	子		も	は	舟	し	位	。
	は	お	作	人	に	寺	か	
ミ	あ	寺	ら	の	燈	ま	り	養
ロ	る	の	ぬ	み	灯	つ	四	蚕
ウ		行	一	加	を	り	月	。
と	お	事	般	や	つ	せ	で	桑
岩	寺	と	に	る	け	ぬ	種	食
に	に	し	は	大	酒	行	子	わ
祈	行	て	は	き	を	事	す	す
る	く	献	何	な	の	と	も	。
		燈	も	舟	出	し	こ	肥
ミ	祈		せ	に		て	の	料
ロ	子	見	ぬ	皆	男	は	月	運
ウ	岩	物		の	だ		で	搬
堂	に	に	仏		け	舟	。	。

部	い	下	田	五	は	の	白	然	に
落	。	旬	植	月	な	言	い	石	石
の	フ	六	、		い	葉	紙	の	か
幼	マ	月	畑		。	は	を	奇	あ
け	シ	上	の			あ	か	岩	っ
る	は	旬	除			る	け	か	て
人	あ	、	草				て	あ	そ
は	る	麦	、			四	来	っ	れ
全	。	の	蚕			月	る	て	に
部	平	刈	の			に			祈
出	原	入	棚			別	男	そ	る
る	郡	れ	上			に	は	れ	。
		、	け			作	よ	に	又
回	安	施	、			っ	く	祈	家
月	シ	肥	收			て	知	る	に
よ	郡	。	蒔			食	ら		二
り	に	ワ				う	ぬ	祭	ヶ
も	郷	レ				師		物	所
い	土	は	五			馳	祈	は	に
そ	軍	な	月			走	り	飯	自

日	同	し	死	は	名	端	年	か
今	い	た	ん	生	節	午	か	し
は	休	事	だ	ま	は		ら	い
五	日	は	人	た	元		来	
日	四	な	の	者	旦		ない	田
だ	五	い	た	の	端		の	植
け	六		め	の	午		で	の
位	の	祀	の	名			ど	時
	三	祭	節	日	寒		う	は
	日	の		と	食		し	昔
		や	故	思			よ	か
		り	に	わ	秋		う	ら
	忙	方	端	れ	夕		か	人
	しい	は	午				と	夫
	人	元	の	寒	元		思	か
	は	旦	祀	食	旦		っ	い
	四	や	祭	と	と		て	た
	五	寒	は	秋	端		い	か
	兩	食	大	夕	午		る	今
		と		は				

菖

蒲を叩く事はない。

なり	ある。	一等	脚戦	男は	集し	子宮	せん	て一	当日
ゴ		二等	戦の	脚戦	たも	病に	いて	年肉	祀祭
山	その		主催	スモウ	のは	よし。	のあ。	の薬	の後、
ス	時は	一等	は郡	女は	特に	よも	よく	する。	ヨモ
ボン	賞品	部	と面	はグ	効か	ずも	きく。	お	ギを
山	はない	部	の場合	ラン	多い。	養母	きく。	オ	採取
一		部	かあ	コ。	今も	草も	養母	のモ	する。
定	場所	主	ある		各	この	を採	グ	かわ
し	はこ	催す	賞品		家	の日	集す	サに	かし
て	の部	時も	は		で	に採	する。	する。	
い					や				
る					る。				
る									
面									
の									
主									
催									
の									

時 には  時  に 選 定 する。 一 定 せ ず。 最 近 は 面
 で は や う す、 郡 主 権 (郡 守) で 各 面 で 余 選 を 十
 せ る。 そ れ か 面 主 権 と 同 い。 二、三 年 前 よ り な
 く な る。 郡 で や る 場 合 は **邑** 内 で や る。 今 年 は
 海 軍 記 念 日 に や る。 前 は 端 午。 そ の 時 は 見 物
 は 沢 山。 五 千 以 上 も 集 ま る。 こ れ か 地 方 的 な
 最 大 行 事。 見 物 に は 女 も 来 る。 形 式。 十 年 前 は
 部 落 内 に 四、五 ケ 所 造 っ て、 楽 し め に や っ て い
 た。 十 年 来 は 競 争 的 に な り、 面 ~~ま~~ 又 は 郡 主 権 に

なつていた。見物は女、男も行く。前から三
 十代位までの女もやっていったが、多いのは未
 婚位。昔から女がブランクを端午にやんば夏
 に蚊にかまぬと信じられていた。十年來は
 端午の日に同じ場所では、脚戦とブランクが
 ある。この二つかこの地方で一番興味を持た
 れている行楽である。もとは露店も沢山あつ
 た。売物も娯楽本位。見世物も幾らかあつた。
 一番大騒ぎの時は端午のこの二つの行事の時
 である。各家では祀祭を行ない、即馳走もある。

補

整

整

獲

六月

又別を告かう。

は田、女は畑といふのか昔からのまゝ。地は

女、^手田のリュウ、コイサイ雨郡のサでは男

が、田の除草も女も出た。田も畑も男も

女。前にも苗取りを女かしてゐた。今はそれ

女の労働―事変後は女も田に出る。苗取りは

水田除草。畑の牛耕、~~露土~~大麻の収穫調

上旬は麦刈。麦の脱穀調整。馬鈴薯の収

六月十五日流頭には何もせず。祀祭もせ

覆

24-25

24

七月

ぬ。伏遊(ボンノリ)は犬を食う。三伏に。山に登って集まったり犬を食い酒をのんでいた。五人から十人が山や川辺で食って遊ぶ。この時は歌ったり踊ったりする。男だけ参加。各家庭では何もせぬ。他の人は全部仕事する。別に日休日ではない。希望者だけが伏遊をする。初伏の時に犬の汁を熱いうちに食って汗を流す。それは、それが汗かおないと信じられてい

~~あ~~

~~あ~~

□

菰

野菜の播種。大豆畑除草。水稻除草。ソバ

も播く。もろこしを食いはいめる。雑肥の

草取り。乾草の草取り。牛の飼料を毎日その

日の分を取って来て食わす。松の枯枝の残り

を見る。松タン油の材料。小麦を種く。蚕の收

穫。七夕には何もしない。七月に城隍

の別祭。流行病の時など。例祭の時と同じ。

巫女と来ず。休まず。白中。祀祭なし。何も

なし。休まず。即馳走もない。

八月

堆肥の草刈り。乾草の草刈り。粟の収穫。

下旬は小麦の播種。稲の収穫も下旬より。柿

の収穫。新はここではきらず。

秋夕。大体寒食に似ている。祀祭、五代^{まご}

の墓祭、十四日^へ十五日休む。墓の多い人は十

四日から始めるが、一般に十五日だけ。墓祭

の形式は寒食の時と同じ。娯楽は別にない。

餅を作る。市馳走はよくある。タル^月マ^月テ^月迎^月もや

る人がある。月を賞するのみ。祭物^{はや}祈りな

し。

九月

小麦の播種。

高粱收穫。

大豆の收穫。

收穫

上旬より下旬まで。

物の運搬。

脱穀は事変前は九月中より十月上

旬にかけて。

今は伐ったらすぐその場でやる。

高粱、

大豆の脱穀、

十月下旬、十一月中旬ま

で、十一月が一番盛んである。

秋耕はしてい

ない。忙しいから。すぐ結凍するから。

時亨、

城隍祭、

秋典がある。

この一同族で

一番行列の高い人から五代であるから十七代

祝の内八つの墓を祀る。十七代とは行列の一

祖

者低くから教えて然り。時亨には宗家は関係
 ない。○
 家には事実上帰らない。宗家は普通の家と同
 い。宗家の主人は特別の役目なし。宗家の役
 割は宗家が部落の代表になる。
 時亨の祭官は、山に登った人の中で最年長
 者三人が献官になる。祭官はこの三人だけ。
 その外に若い二人を執事とする。それが色々
 の世話し、祝文もよむ。三人は献官になるだ
 けである。

白人

ここの始祖の時亨には三四百名も集ま
 るし、忙しい時は百人位。他道に行つてた人も
 十年前には帰つて来た事もある。今はな
 い。平壤からも時に帰る。この部落に(三部落
 で)百戸、この面内では他に十数戸。郡内では
 なし。他郡に約百戸(トウセン郡、カイセン郡)
 江海道を全して然り。平壤にも二十戸位。(三
 十年前族譜製作の頃は四百戸位、それが今で
 はよく分らなくなつた。

宗契の範囲、時亨にはカイセン郡からや平

壊から代表者が来ていた。今はこない。
 門契の範囲は全部であるが、内会に参席す
 る人はこの百戸、セイセン郡の有志位であ
 る。総計百二十戸。時亨の祭のあと山で飲
 福した。以後は牛豚を用いた。そのあとで内
 会がある。内長の家で行う。内長は最高令者。
 定期の一年一回の集会。祀るのは高い祖先か
 ら。九月九日朝お登して墓に行く。ニヶ所にか
 たまっている。午前は一ヶ所、午後は一ヶ所であ
 る。

十月

收穫^稲の運搬、箱の脱穀、供出。籾の供出十

月中に終り、雑穀は十一月一杯。綿は九月中、

下旬より十月上旬にかけ綿の供出。漬物。立

冬前後にやる。行事はなし。

十一月

箱脱穀供出十月のつぎ。雑穀の脱穀供出、

十月のつぎ。行事ー冬至にお粥を作り祖先

を祀る。小豆の粥。娛樂もなし。即馳走もな

し。

十二月

農

菓細工、以、縄、家具の修理。

十二月一日

を臘ロウ日ニチという。祭はない。豚を殺してそれを食

う。豚油を薬用として保管する。雪の水を保

管する。夏まで。薬用にする。平原郡の海岸

地帯では一年中の水を貯える。雪の事をし。

大海日には寝ない。たかいの（ ）もない。窓の

カンたつておく。鬼をいさめという。

大海日の施別に食う部はないが、正月準備の

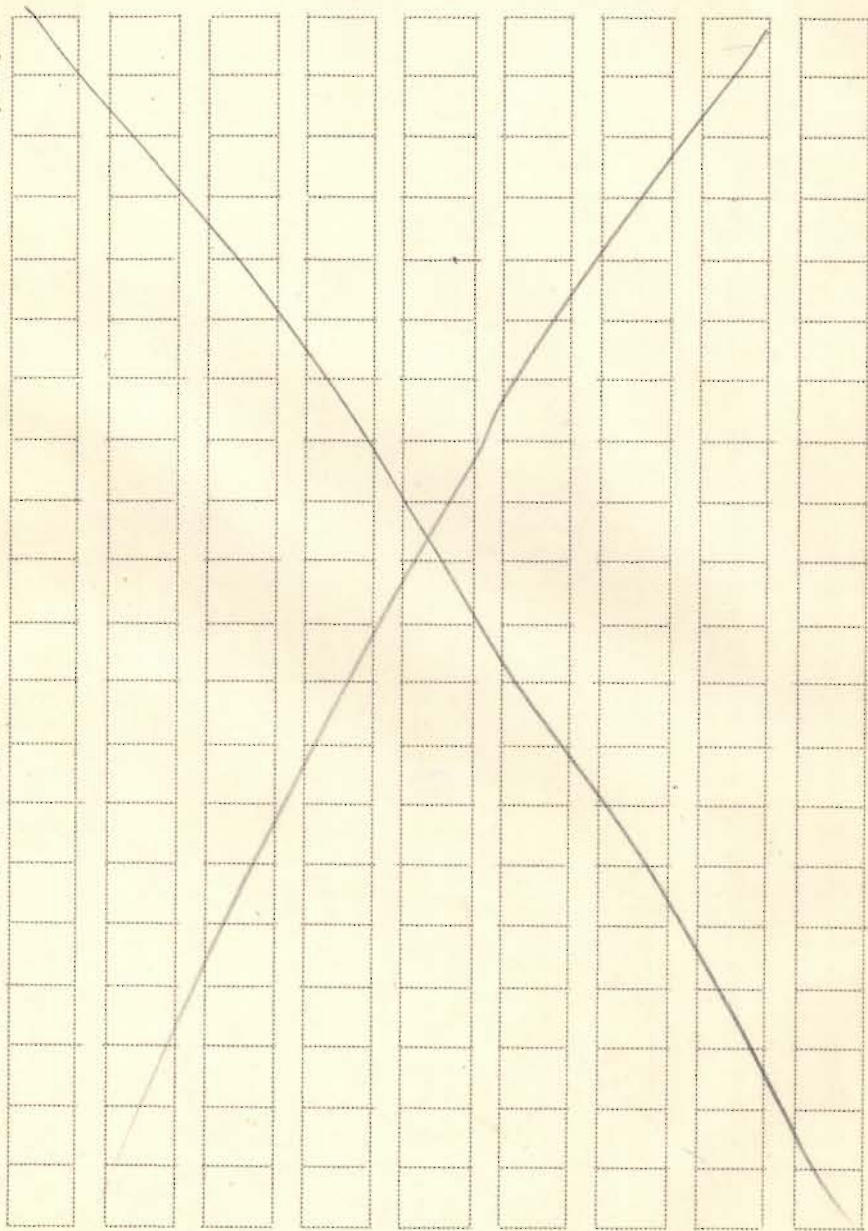
餅を食う。才暮を（ ）贈る。白合の情義のあそ家

20×10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

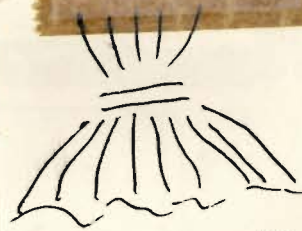
12
 10
 8
 6
 4
 2
 0
 1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12

110



20×10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)



チユチヨリ

神造

家宅神

一、土寅トガ之屋敷を守る神。今もある家も

ある。素焼のイカメに穀物や金銭をのせてそ

のの上に石のふたをおきその上を更に粟からの

チユチヨリをかぶせる。三月に祀る。地運祭

という。その時家の神は皆祀る。主婦が祀る。

鶏、栗一斗、大根、昆布と合せて肴を作る。

夜十時頃祀る。今では一部落に戸あるかな

いか位。

一、帝親、財産の神。カメに米を一はい入

20×10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

て時にくさったらとりかえる。その上や横に
 俵を毎年積み加える。納屋の中においてある。
 今はやらぬ。今一戸もやらぬ。祀りは地運祭
 の時、特別にはない。俵を加えるのも地運祭
 の時にやる。土宮と同じ祭物を膳にのせて祀
 る。
 一、
 4ヨワン竈王は竈の上に祀る。形はない。
 地運祭の時に祀る。こゝもお膳にのせる。地
 運祭の事を土神祭ともいう。トサ土祀ともい
 う。

書名 朝鮮社会 (56)

原稿番号：# 861 ~ 866

号数： 9ホ

字詰： 字× 行× 段 ()

改丁指定：

文撰氏名：朝日 (箱 分) 月 日

植字氏名： (頁^{ハミ} ^{ダシ}) 月 日

担当

一、

三神等。

一、

子を[○]たいために七星祈禱をする人もあ

る。

右の外に[○]_○を

科田とは一族会戸で持

ち、族中に科挙に通じた人に收獲をやる田。

科契は若い人が金をおし合って、土地を買い

て内で科挙に通じた人にやる。やはり同族

の中である。ある内中では今もこゝに類する

制があるという事である。内契の一事業とし

てである。

20×10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

昭和十一年三月

116

明川洞

はつて

流頭

沈黙七又の中
には起る

時享

又は十九日、
今うきんをいす。

踏巻の

結果

得たる

結論

の所見

明川洞

延け

一年中

の

高木

第百

は

瑞年

21

男

16

脚

踏

巻

靴

連

取

4人

集

時

16

脚

踏

巻

靴

連

取

4人

集

時

あ

ん

か

今

は

あ

る

は

あ

る

は

あ

ん

か

今

は

あ

る

は

あ

る

は

あ

ん

か

今

は

あ

る

は

あ

る

は

あ

ん

か

今

は

あ

る

は

あ

る

は

あ

ん

か

今

は

あ

る

は

あ

る

は

あ

ん

か

今

は

あ

る

は

あ

る

は

12
 時辰
 大
 5
 の
 如きもの
 行
 か
 適
 る
 事
 要め
 集めるに

二、の
親
の
あ
の
儒
道
本
会
の
照
と
盛
大
の

ち、又、この山神妙法は、~~また~~ ~~は~~ ~~た~~ 龍王である。今

せ
そ
す
し
て
あ
。

見十
 19
 11
 4又
 獲運
 11
 7
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20

平南昭山町俵沢南藤満次

藤海定、一、年中、一、高村人、~~達~~、~~執~~、~~望~~、し、~~局~~

、日、は、~~前~~、~~部~~、~~落~~、~~な~~、~~脚~~、~~上~~、~~総~~、~~か~~、~~あ~~、~~つ~~、~~た~~、~~十~~

年、~~前~~、~~規~~、~~模~~、~~は~~、~~部~~、~~落~~、~~な~~、~~は~~、~~十~~、~~年~~、~~前~~、~~葉~~

、~~規~~、~~模~~、~~は~~、~~部~~、~~落~~、~~な~~、~~は~~、~~十~~、~~年~~、~~前~~、~~葉~~

、~~規~~、~~模~~、~~は~~、~~部~~、~~落~~、~~な~~、~~は~~、~~十~~、~~年~~、~~前~~、~~葉~~

、~~規~~、~~模~~、~~は~~、~~部~~、~~落~~、~~な~~、~~は~~、~~十~~、~~年~~、~~前~~、~~葉~~

、~~規~~、~~模~~、~~は~~、~~部~~、~~落~~、~~な~~、~~は~~、~~十~~、~~年~~、~~前~~、~~葉~~

、~~規~~、~~模~~、~~は~~、~~部~~、~~落~~、~~な~~、~~は~~、~~十~~、~~年~~、~~前~~、~~葉~~

、~~規~~、~~模~~、~~は~~、~~部~~、~~落~~、~~な~~、~~は~~、~~十~~、~~年~~、~~前~~、~~葉~~

、~~規~~、~~模~~、~~は~~、~~部~~、~~落~~、~~な~~、~~は~~、~~十~~、~~年~~、~~前~~、~~葉~~

同族部落
同族部落

月
 九
 12
 12
 12
 12
 12

收獲運搬
 午後
 九月
 十一日
 非常
 多忙
 一
 中

部
あ
い

西地
山
本
早
東
か
能
上
多
野

2
9
0
2
9
0
竹
島
12
若
飛
馬
0
大
馬
9
12

卯
ノ
ル
フ
ヲ
ナ
カ
ク
シ
。
~~ハ~~
シ
十
四
十
百
法

[illegible]

花は、
一時的な
流行の
北の

P.

としし 向かふよ。

西北の 船の 大なる 船に 春の 江戸の

此の 船の 曲に やや 大なる 船の 行きの 事

今一 船の 行きの 事

昭和十九年五月

（印）

書 名 朝鮮社会 (57)

原稿番号 : # 867 ~ 887

号 数 : 9 本

字 詰 : 字 × 行 × 段 ()

改丁指定 : 改丁

文撰氏名 : 朝日 (箱 分) 月 日

植字氏名 : (頁^ミダシ^ナ) 月 日

担当

11

朝鮮民俗採集

9 記録
10 常務
11 常務

No.

男女の別と長幼の序

女は男と口を利く事も不良とされてゐる。

八九才の女の子に道を尋ねても返事しない

のが田舎では普通である。まして一人前の婦

人は男にばかり利かぬ。異性に対しては極めて

無愛想なのが善良とされてゐる。だから百

貨店の女の子などは中以上の家庭ではおさぬ。

女の恥業としては女教員位だけがよい恥業と

20×10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

20×10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

入っ
て来
たの
で、
色を
失っ
てと
び出
した
とい
 衣が
そく
一人
入浴
して
いる
と
肉白
地本の
人の
女が
 い
う話
がある。
東
温泉
で男
湯に
朝鮮
の男
が、
 肉白
地本の
の銭
湯に
行っ
て三
助を
見て
色を
変な
えた
と
 怒鳴
りつ
けて
来た
そう
であ
る。
朝鮮
の婦
人が
 女が
いる
のに
水泳
して
肌を
出す
とは
何事
かと
 泳し
てい
たら、
野良
にいた
百姓
二人
が来
て、
 肌を
出さ
ぬ。高
山が郡
山附近
の村の
小川で
水
 泳く事
を蔑視
してい
る。異
性の前
では絶
対に
 入っ
てい
る。女
は男の
前にお
ぬの
みなり
ず、

20×10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

う事がある。以^和君の話ではもし男女が共に
 入浴した事が分れば、それだけで村を追いか
 される位である。家庭内に於いても休^休と
 の前でも男は肌を出さぬ。兄妹でも七八才以
 上になればしかりである。雨^雨班^班だけでなく常
 民においても皆しかりである。歌は女は人前
 では殆んど絶対に歌わぬ。→家庭内で夫婦が共
 に食事する事はない。歌をうたう女は妓生
 のみ^{のみ}と思われ^{思われ}る。他人々別々であ
 る。兄弟だけは一緒に食う。

サカ

食事の事

食事

19

110

長幼の序については、他人でも五才の上は
 兄、十才の上は兄兄文に準ずべしという。朝鮮
 では年長者程权威がある。地方では老人はど
 んな貧しい地位の低い者でも、若い者に対し
 ては目下に対する言葉を用いる。未婚者は特
 に軽視される。何事によらず文が子に相談す
 るよく事はない。父と同席して子は坐する事
 なく立っている。父父は長者の前で、酒下タバ
 コを用いる事なし。目眼鏡も用いない。父子、

食を共にすることなし。

△
一
一

弟の嫌悪

大抵五十にならば常民でもゆかぬ。子供に

依頼する。老人でゆくのには子供が可者である。

嫁が来たら主婦も命令するだけで自分にはゆか

ぬ。少し金があれば召使いを何人も置く。田

舎で五万円も持っていては、召使四五人は使

っている。

弟ゆしない両班は常民の老人や婦人等は祖

20×10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

先祭や誕生日の祝や名節の行事などを行^なう。

梨花女^{（等）}の出身者は大抵妻になるという。

幼かないでよいからである。女学校に出すの

は、その娘が婦になつた時幼かないでよいか

うである。女学校まで出ているのに幼かす^{（様）}よう

な事はないと考えている。内地人の相当地

位高い人が女中として主婦かゆくを不思議

に思っている。朝鮮では下女下男が多い。

20×10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

個人主義傾向

△印

110

家族中の者が集って一家カンランとして食事
 する様な事は絶対にない。朝鮮の家庭では、
 祖先祭の外に家族一人ひとりの誕生日の祝が相
 当盛大に行われる。即ち走を作り餅を作る。
 祭事は何もない。朝鮮の家には夫婦の組か二
 組^{ある}成いは三組もあるが、常民でも夫婦一組毎
 に建物(キエ)が別になる。同じ屋敷内にはある
 が別棟である。しかしその夫婦も食事をい共
 にしない。男女によって分れ、世代によって

20×10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

また大いに別々でいる。誕生日は男女共に祝う。
 ご飯を山もりにして本人に食わす。若芽の汁
 も必ず出す。常民農家でもしかり。朝食の時
 だけ飯は山もり。昼食、夕食は大体普通。時に
 リーメンを用うる。三食共に馳走する。祭事
 はない。父や祖父の誕生祝には村の人々も招
 く。子供の誕生祝はそれほど盛大にはせぬ。誕生
 祝は親孝行の現れの一つで、父や母等の誕生
 日を祝ってやるのである。父母かうにとわる
 場合も多い。しないでもよいと申告する場合

20×10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

もよくある。その最盛大のか還暦の祝であ
る。招くのは同族近隣老人等と招く。父母が
死んで三年忌の内にその還暦の年か来ると盛
大に祝つてやる。

△
一戸

朝鮮の民家

最も簡単な場合は内房一室で、それに釜の
あるところ即ちポオウがある。内房か更に一
室を増せば、^{ウベシ}越房か加わる。更に一室加われ
ば中房（カオンデホン）が加わる。^{ウベシ}総て夫人がいる

20×10

（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

116

ところが内房である。原則的にいえば朝鮮の
 家は内房と外房ばかりで(金廊と同義)の二部よ
 りなる。貧しい者には外房はない。外房は男
 子の居室、応接室である。内房と外房は棟を
 異にする。内房の棟はアンキ工(内房の建物)
 とサランキ工(金廊の建物)に別れる。内房外房
 の外に召使の住居のために大門の横などに室
 がある事がある。それをハントンバンという。
 板敷の一室が内房にある事がある。祭の時や
 夏涼むために用いられる。^{ハントン}大廳^{キョウ}という。廊下

20×10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

というよりもサニールムの様ような役をするもの

にマルというのがある。マルの狭いもので

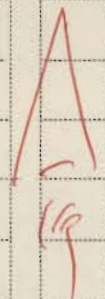
~~本~~地の濡れ縁に相当するものにトエマンという

のもある。堂は家族の誰（誰）かの室である。全

家族の共同のものはない。内庭はいわば通路

である。庭園が発達しない理由であろう。日

本の庭園は家族中のものである。



被雇人

年期被雇人田イルム、大概一年期一冬

20×10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

農

No.

は春の耕作、頃から秋の収穫終るまで。三、
四十迄の独身者、割合多い。家を持たぬ。貧

家の子は外來者。村の青年宿サランに泊る。

青年宿は常民の家サラン。或る程度富裕の

家。宿泊料はやうぬ。青年宿の常民は自身で

イルクムを持ち、それをサランに泊している

ので、村の他のイルクムもそこに一緒に来て

寝るといふ風である。朝報は何も無い。イル

クムは食事は主人の家で食う。一年幼いて以

前は五十円、今は百三十円。雨の日

などは ~~昔~~ 青年宿に来てミろかり飯だけは主
 人の家に行つてたべる。村に自家がある場合
 にも、食事に寝にも行かぬ。自分の家には
 夕食後など行く時もある。甲の家に一年、来
 月は乙の家にという風で、同一の主人の家
 何年もつとめる事は余りない。老年まで独身
 の者もよくある。五十戸の部落にそんな独身
 者二十以上ののは五六人はいる。五十戸に兩班
 は一二戸。主人は春と夏に服を二着すつて
 する。一年に二三着やるが ~~例~~ である。洗濯も主

No.

人の家でやる。常民の主人は自家にとめる。
 大きな農家にはイルクムが二、三人いる。妻帯
 者のイルクムもいる。
 住みこみの下男出千ヨング *Cheng* は農事は殆
 どせず。農^繁期には農事もする。妻帯で、夫妻
 で下女下男の場合が多い。下男は下人(ハイン)
 下女はハーニヤという。下女下男の住む所を
 ハンナングチエという。ハンナングとは下男
 の意。大抵大内の横にある。食物は主家から
 三度共分けて貰う。主人の家から別に附近に

No.

家をもたして~~もら~~ハンナがある。毎日主
 に来る。小作地を与えてある場合もある。主
 人の家で食事はとる場合が多い。妻は下女と
 してつかえる。子供も主人の子等と~~遊~~ぶ。ハ
 ンナは昔は~~世襲~~的に主家につかえた。常
 民の一種である。普通の部落には賤民はいな
 い。いるのは屠殺~~も~~が必要な邑などにのみある。
 邑と邑内は同義~~。~~郡には邑は唯一つ。昔は町
 場は郡すなわち所在地以外にはなかった。市場も邑
 のみ、小さな市は農村部落にも少しはある。

No.

朝鮮の豆撒き

町場として発達したのには邑のや。邑には市場
 の設置がある。邑には常に市場はある。
 雑用人出下女の一種、大抵一人者、ハ一二
 の一種、小守女（ハ）
 雇は村の手にあまつた人が誰でもなる。
 貧農に限った事はない。対等の関係である。
 春窮期から契約する時もあるが、二三日前に
 やる場合もある。

A
一ヶ

No.

朝鮮
の
小正月△
一
下ポ
ル
ム
と
い
う。こ
の
行
事
の
事
も
ポ
ル
ム
と
い
う。 十
五
日
の
事
もと
い
う。 ト
ー
ウ
イ
と
は
暑
気
あ
た
り
の
意
で
あ
る。そ
の
時
ト
ー
ウ
イ
と
デ
キ
モ
ノ
(腫
物)
さ
も
つ
て
行
けこ
れ
等
の
実
の
穀
を
は
い
で、 戸
外
に
な
け
す
て
る。十
四
日
の
夜 ~~ある~~ い
は
十
五
日
の
早
朝
に
子
供
等
が、あ
る。 こ
れ
を
総
稱
し
て
ポ
ル
ム
と
い
う。 旧
正
月こ
こ
で
は
豆
で
な
く、 ウ
ル
ミ、 栗、 松
の
実
での
生

No.

十四日の夜に夕食に^(チヤコウハグ)雑穀飯を食う。一家中
で食う。何かの厄^ヤ祓いである。雑穀飯には米
の外に雑穀と名のつくものは皆入れる。粟、
大豆、キビ、緑豆、小豆、(麦は余り入れぬ)等
を入れる。お菜には山菜のありたけを入れる。
九種か十二種のものを入れる。この菜の事を^{イロ}九種
山菜には平カボチャ、大根の^葉葉の干したものを
ワラビ、トラヂ、大根、モヤシ、その他を入
れる。出来るだけ数が多い^(の)が^は好^いなりとなる。
最小限度^は九^は十二種。

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

（編者記）

この菜のことを○○○はナ

ムルかもしれぬ。原稿欄外に次の記入あり。

ナナルルには二種ある。春の青い山菜はフン

ナナルルという。ヨモギ、メ、ネンイ、ナルゲ

ニイ、セリ。他の一種は干した保存にたえう

るもの。そしはナムルという。大豆のモヤシ

はコンナムルという。緑豆のモヤシはシユク

キエナムルという。切干大根もナムルの一種

。ナ

No.

コンクルとフクンと満洲の難派
 タイハイは今悪い意味で問題になった。
 旧屯で納税の内にタンハイをとる。漢代か
 あるという。金で困る人を屯で援助する。タ
 ンハイの徴集、支配等に不正もある。で問題
 である。困る場合の徴用、徴発、病氣や死亡
 などない屯の事、修膳費、人件費、しかり。
 会費と私費と混用。役人の招待費。屯費とも
 考えられる。宴会費等もある。屯費としては
 タンハイの外にない。最近行政単位でタ

中世

一戸

タンハイ

No.

ン
バ
イ
と
と
る。
北
安
省
の
例。

(昭和十八年八月起稿)

12

書名 朝鮮社会 (58)

原稿番号 : # 858-895

号数 : 9木

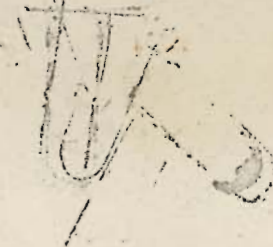
字詰 : 字× 行× 段 ()

改丁指定 : 改丁

文撰氏名 : 朝日 (箱 分) 月 日

植字氏名 : (頁^ミダシ^ナ) 月 日

担当



28頁
3下

付

一、朝鮮農村の近代化の文化史的意義
 近世に於ける農村社会の變容變質の方向は
 一、~~日本に於ける~~と朝鮮に於けるとは大體に一
 様であるが、變化の過程は相當に異なっている
 。日本に於ける著しい近世の變化は明治維新
 の革新運動であった。明治維新に於ける政治機構
 の變革が農村に於ける近世の變化の第一段階であ
 った。この變化に伴って大なる身分的變化
 と所有權の變化があつた。その後漸くに然し
 執業にヨリ出づる生活文化が流入して来た。

P.

それは他人之我化自由と我他合致と我化の線
 に沿つて進んで行つた。そしてやや遅れに
 し、~~農村~~と~~都市~~の間に於ける經濟的~~差~~が農村
 に抑へよせて来た。この過程は日清日露歐米大
 戦の三つの大戦争の一つ毎に~~猛烈~~に増進して
 来た。そして農村が~~没~~の地盤に~~陥~~ちた。こ
 の~~没~~の地盤は~~農村~~を~~何~~と~~か~~救済しなければ
 ならぬと考へ、~~農村~~の~~没~~は~~農村~~の~~没~~である。日本農村の近代
 化は~~農村~~の~~没~~である。

といふ二れとは異なつて居る。朝鮮の農村に
一は、罪い込んで来る近世的文化の使者は資本
主義的經濟の端であつた。自分の權利や政治
的權利は昔の習まゝにしろ、土地所有權の所在
が俄かに變つて来た。その條件を知らずして執拗
にヨリヨリ生活文化が流入して来た。そ
れは、~~朝鮮~~に於いては同じ様に他人を排他自由
主義化合理主義化の線に沿つて進んで来た。内
地へ向けるとは變化の現象形勢は著しく異な
つて居る。ここでは政治的機構の改革と共に伴

つて自分の變化は最終にやつて来た使者であ
つた。日韓合併がそれである。
~~朝鮮~~農村に流入して来た三つの革新的主體
は、
一、この政治改革、ヨリヨリ文化の
流入、資本主義的經濟は、全く順序を逆にし
て朝鮮の農村にも~~あつた~~。順序は逆であつ
たが、その~~結果~~のほうは同じ様である。合併
後、この農村を救済す。晩年の資本主義は
いふまでもなく、~~その~~資本主義の改革は、
（當時に於いて）~~資本主義~~の考へ方
（同様）である。所詮はヨリヨリ政治的考へ方

67

錢 用 郎 892 榮 木 鈴

書名 朝鮮社会 (59)
原稿番号 : # 824-902
号数 : 9ホ
字詰 : 字× 行× 段 ()
改丁指定 : 247
文撰氏名 : 朝日 (箱 分) 月 日
植字氏名 : (頁^{ハミ} ^{ダン}ナ) 月 日

担当

付○朝鮮農村部落調査項目

行政的地域集團、官設的集團

旧洞里の決定

行政的區画分令の丁足

旧面の社会的統一性

旧面の行政組織

行政了

二○洞祭、その他の信仰対象

祭神 □ □ 私 □ □ 起原

洞祭、(時、準備、祭官、費用、祭典の模

様、付近部落に於ける事情)

その他の信仰対象

呪術者

行政了

三、契(殖産契)、産業組合、金融組合、小

組合(洞契)

部落内各戸(番号による)の各種の契、

殖産契、産組、金融組合に加入の重複例

保の具体的事実の調査決定

お見直し

。各種の契につき組織事業財産、創立年及
び近〇殖産契、産祖、洞契について石
と同じ

四〇 郷約

。西班門中〇数〇戸数〇儒林団の組織
儒生数、文廟、郷〇〇社〇

。郷約の現状

。徳行柏勵の実行（郷約藉）

。遺失相現の実行（四訓則の励行）

。礼俗柏友の実行（年始礼、結婚の祝、
八十老寿祝、弔慰）

。患難柏恤の実行（水害火災の扶助、疾
病、孤遺、貧困、死葬の社、郷約

。契の現状（郷約契の団単位組織、二

洞里一〇の如きもの）

。洞里契（他〇の契と郷約の関係（儒林の加

入及び指導の事情、儒林の社会的地位

。現状、儒林団の事業、明党関係、郷

約籍、郷約会

一行了

89

五、宗中及び同内の性別

同内の同族別の社会的成層及び社会構成

同会、他の位、自作小作関係

同内の同族別居住形式

宗中組織

宗家、門長、有司、内会（宗会）

宗約、宗約所、宗約（宗憲）、宗

中財産（宗山、宗土、佐土、宗田、宗

苗、祭仕田、墓田、田、有苗、義

庄）

宗中事業

祖先の祭祀、時享（大祭）、茶祭（

小祭）、忌祭

勤農、教育、風習教養、納税

大同宗契（郡内）と宗族契（各宗派）

と門契（部落内）、人名称不定

一行了

廟

○家廟（祖先四代を祀る祠堂）

別廟（五代以上の祖先を祀る場合、別

に一室を建つ）

祠院（国または士林の建設）

書院（士林の建設）

青年男女関係の實際如何

行

儒林の郡内組織、宗中の郡内組織

行

84

六 洞会、共同祈願、村仕事、部落有財産

村ハ４丁、洞約

洞会の組織・会令・事業、洞会の年中

行事

洞会と洞契・洞祭、共同祈願と村仕

事との関係

洞約の組織事業、村ハ４丁の今昔

共同祈願・村仕事の集団組織及び実践

事項

部落有財産の品目、偏格、維持形式

七、生業

各戸職業別調べ

非農業家族の生業及び生活（特に飲食

店と全戸の割合）

地主・自作の作別調べ、小作料、各戸

経営地面積反当収量、経営費（肥料

反当地価

男女老若別労働事情

生活費

ハ、ワレ、70マシ等共同労働形式

ワレの役員、開始より解散までの経過

70マシを行なう労働の種類、人数

ものも、と多、70マシにつき詳述

70マシと血縁・地縁関係、階級、

力量、性別等の関係。

70マシにおける交換の形式（人力と

畜力、男と女、労働と金銭等の関

係）

丸
近隣集団

〽 五家〇の遺利の〇〇

〽 婚・葬・産・病・火事にはけり相互扶
助形式

〽 土産の分配

〽 貸借

〽 招宴

〽 援助・庇護・協力

一行ア

小見出し

- ① 家族員に②村外にある者の居住地・
- ③ 家族員数最大のものを
- ④ 家族内の統括

現職等

十一 家族及び分家、来住、往住

84

村中での娯楽

一 行

小見出し

十 集会及び会宴及び娯楽

84

① 各別につき詳述

② 集会の種類（葬式、協議、会宴、協働

③ 会合の首長

④ 座席・費用の負担、男女老若別の会合。

⑤ 家を単位とする場合と個人を単位とする場合

⑥ 娯楽

⑦ 結婚前男子、女子の（春夏秋冬）

⑧ 男の娯楽、女の娯楽、老人の娯楽

や見出し

十二 年中行事

84

月：よみの作製

（気象、生業、祭祀、娯楽、会合、等につき）

一行アキ

春夏秋冬の一日の家族生活
誕生の祝と祖生の祭

一行アキ

十三 通婚圖、市場関係（売買圖）

結婚年令
結婚式及びその前日
私生児ならびに〇〇い
東住者の数及び〇取扱、住住の（）
財産
家屋の構造
家室の利用事情
家計調査 家族労働力

一行アキ

行商人、孤立商店、商店群、町の
 利用
 旅行の機会（年平均の村民の）

①

と面と郡の社会性
 ① 通婚圏の決定
 通婚圏と郡面洞の関係
 階級的内婚の関係
 特定部落への通婚
 同族団相互間の通婚に下ける多い
 ものと少ないもの
 古来郷約を組みし他部落ありや
 ① 市場関係の決定
 市場利用の定情